

2016年度シンポジウム 「怪談・民話を地域資源として受け継ぐ —小泉八雲、ふるさと怪談に学ぶ—」

日時：2017年3月18日（土）13：30～17：00

会場：豊橋校舎 記念会館小講堂

【音楽資源としての小泉八雲の『怪談』】

薩摩琵琶の演奏と講話 小泉八雲『怪談』〈おしどり〉より 村田清水氏

【基調講演】

地域資源としてのふしぎ文学～小泉八雲と怪談の活用をめぐって～

小泉凡氏（島根県立大学短期大学部教授、小泉八雲記念館館長、小泉八雲の曾孫）

【基調講演へのコメント】

東雅夫氏（アンソロジスト、文芸評論家）

【パネルディスカッション】

小泉凡氏、東雅夫氏、豊田高広氏（田原市中央図書館長）、

内浦有美氏（総合郷土研究所研究員、株式会社うちうら・ぱったり堂代表）

【趣旨説明】

司会（近藤暁夫 総合郷土研究所運営委員）：本日はお集まりいただきありがとうございます。まずは本日のシンポジウムの趣旨について説明させていただきます。まず、肌感覚の問題意識ですが、怪談・民話をめぐる近年の傾向について、一つはだんだんと地域で受け継がれなくなってきている。つまり話者が少なくなっていくことへの危機感があります。我々は研究者ですので色んなところに行って様々な地元の方に話を聞いてくるということを仕事にしているのですが、それがだんだん難しくなっていく。そして二つ目が、我々研究者としては様々な地域の様々な話を採録して報告書を出すわけなのですが、それで大体仕事はおしまいということが多くて、実際のところ民間から何か色んな物をもたらってきて、それを記述して論文や本にして出しておしまいみたいなかたちになっている。でもそれは、結局は民間にある豊穡な文化をただ吸い取って倉庫の中に置いておくだけなんじゃないかというようなジレンマも感じています。結局、話を聞いて報告書を出すだけで終わると地域の話者の減少に対して何の手立ても打っていないというわけで、自分の研究対象が目の前で消滅していつているのを傍観しているようなところがある。これは反省しないといけない。何とか新しいかたちとして地域に戻すということができないかということです。模索している段階で、答えは出ていないのですが。

そのような危機感のもと、本日は「怪談や民話をどうやって活かしていくか」について、第一線でご活躍の皆様にお知恵をお借りしたく企画しました。我々も本当に勉強したいと思います。

そして、本日会場にこれだけの人が集まっていたということには、非常に希望を感じております。これからみなさん、色々な方たちと一緒に、怪談や民話に代表される地域の歴史とか文化というものを研究・採録するに留まらず、積極的に資源として活用してさらに新しいかたちの地域づくり、地域おこしをぜひ考えていければと思います。本日はどうぞよろしくお願い致します。

それでは早速企画を進めさせていただきますが、まずは小泉先生の講演に先立ちまして、「怪談というものは一体どういうものなのか」「小泉八雲とはどのような作品を残したのか」を知っていただく入り口として、小泉八雲『怪談』の作品の一つを薩摩琵琶で演奏いただきたいと思っております。演奏いただきますのは、薩摩琵琶の村田青水先生でございます。では、村田先生どうぞよろしくお願いを致します。

【音楽資源としての小泉八雲の『怪談』】

村田：皆様、改めましてこんにちは。村田青水と申します。私は八雲さんのお話で最初に聞いた話が『雪女』だったんですね。『耳なし芳一』よりも『雪女』だったんです。『雪女』の話は本当に女の悲しみというか、それは幼いながらに心に残りまして、そういう話すごい好きだなというのがあったんですけれども。本日は八雲の怪談の中から『おしどり』という作品を演奏したいと思います。

『おしどり』というのは元の話がございまして。鎌倉時代にできました『古今著聞集』というお話の本がございまして、そのなかに『おしどり』という話があります。それを基に八雲さんが作品化されました。作品を通して、八雲さんは日本人の良さというものを本当によく分かってらっしゃる方だなという感じがしました。それを今日は演奏致します。

このお話の舞台は東北です。陸奥の国の田村の郷というところがございまして。今でいう田村の郷はどの辺りかなと思っておりまして、先日テレビにその場所が出てきまして福島県だそうでございまして。福島県に田村というところがございまして、多分私はそこだと思っております。その田村の郷のお話ではないかと。私の夢ですが、いつか田村の郷でこの『おしどり』が演奏できたらなと思っております。

作品のあらすじを簡単にお話します。田村の郷でおしどりを鉄砲の獵師さんが撃ってしまうのですが、その中で最後に和歌が出てまいります。この和歌が、「日暮るれば／さそいしものを／赤沼の／まこもがくれの／ひとり寝ぞうき」という、この和歌で締めくくっております。この訳は私がちょっと訳させていただいたと、「日が暮ればもう寝ようかと誘ってくれた愛しいあなた、赤沼のまこもが隠してしまったかのようにいなくなってしまった、あなたのいないひとり寝の夜はとても寂しい」という意味の歌でございまして。短歌とか俳句をやってらっしゃる方はよくご存知だと思いますけれども。また、これから語ります文中に「つま」という言葉が出てまいります。この場合は女の人の「妻」ではなくて、「夫」と書いて「つま」と読んでおりますので、その辺りをご理解下さいませ。では演奏させていただきます。小泉八雲、怪談より『おしどり』。

（琵琶演奏）『陸奥の国は田村の郷に孫充という獵師あり。ある日のこと、その日は一つも獲物がとれず心むなく帰る途中、赤沼という所にさしかかりけり。ふと見ればひとつがいのおしどり、水面を寄り添い泳ぎたる。おしどり殺すは本意ではないが、孫充ひもじさ先にたち、狙いさだめ矢を射れば矢はひょっと飛んで雄の胸貫きむ。その夜美しき女がひとり夢枕に立ちてさめざめと泣きたり。なに故そんなに泣くかと問ひければ、昨日赤沼にて何の罪もなき我が夫を殺したまえる。悲しみにたえずして参りてもうすなり。ただ悲しくて、悲しくて、この先一人生きながらえる欲もなくなりぬ。ただそれだけを伝えに参りぬ。あくる朝、再び赤沼へと来てみれば、かの雌のおしどりただ一羽泳ぎける。おしどり孫充に目をとどめ逃げるそぶりなくわき目も振らずまっすぐに泳ぎ来る。やがて孫充の目の前にまどくるや、あつという間におのが嘴で自らを貫きて果てにけり。鳥といえども伴侶を愛する気持ちは人以上であると。殺生業としてきた自身を悔み、後に孫充は剃髪し、出家してけり。日暮るれば／さそいしものを／赤沼の／まこもがくれの／ひとり寝ぞうき』

ご静聴ありがとうございました。



【基調講演：地域資源としてのふしぎ文学～小泉八雲と怪談の活用をめぐる～】

司会（近藤）：村田先生、ありがとうございます。それでは、基調講演に移ります。本日の講師である小泉凡先生（鳥根県立大学短期大学部教授・小泉八雲記念館館長・小泉八雲の曾孫）の詳細なプロフィールはチラシに記載していますので、そちらをご覧ください。先生のご専門は民俗学で、本日は勤務校ならびに小泉八雲記念館のある鳥根県からお忙しい中をお越しいただきました。明日はニューヨークに発たれるということで、多忙なスケジュールの合間を縫って愛知大学までお越しいただきました。本当に有難いことだと思っております。では早速ですが、小泉先生の基調講演「地域資源としてのふしぎ文学～小泉八雲と怪談の活用をめぐる～」です。どうぞよろしくお願い致します。

小泉：皆さん、こんにちは。小泉凡と申します。今日はお招きいただきまして大変光栄に思っております。昨年11月には田原市に來させていただいたんですけども、こんなに早くまたこちらのほうへ、渥美半島に來れるとは思ってもみませんでした。本当に今日は嬉しく思っております。また、個人的には愛知大学には、私が学生時代にお世話になった千葉徳爾先生という地理学、民俗学の先生がおられまして、一緒に飯田線の佐久間という所にフィールドワークに連れて行っていただいた、そういうご縁もあります。それから先ほど豊橋駅から豊橋鉄道で來ましたけれども、私が中学生の時、東京の世田谷の二子玉川という所に住んでいましたが、大井町線という、東急の花形電車がちょうど今豊橋鉄道で走ってるんですね。40年ぶりに対面しまして、何とも嬉しい気持ちになりまして、今日は始まる前からワクワクしているところでございます。



「ふしぎ文学」という言葉を田原の図書館のほうでも使ってもらっちゃると思うんですけども、ほんとにいい言葉だなと思います。簡単に言えば「超自然の物語」ということなんですよ。今日は私の曾祖父にあたります小泉八雲がどのようにして怪談を受け入れてきたか、そしてまた、怪談が今ゆかりの地である松江などでは「地域資源」として活かされるということがありますので、そういったことを紹介させていただければと思います。ちょっと八雲に馴染みのない方もいらっしゃるかと思いますので、一応お手元のレジユメに沿いながら、まずは小泉八雲が54年間、生涯の中でどういうふうに怪談を受け入れてきたのかということをお話させていただきたいと思えます。

レジユメの最初にありますけれども、八雲は晩年、「ゴースト」というエッセイを書いてまして、その「ゴースト」の中でこう言ってるんです。『生まれ故郷から漂泊の旅に出ることのない人は、一生おそらくゴーストがどういふものか知らずに過ごすかもしれない。しかし漂泊の旅人は十分それを知りつくしている。』八雲自身はギリシャで生まれて、アイルランドで育ってイギリス、フランスで教育を受けて大西洋を渡ってアメリカに行き、そしてさらに中米のマルティニークというフランス領の島でも2年間過ごしてから日本に來ています。地球を半周以上回ってるんですね。生涯は54年間ではありましたが、大変数奇な、そして起伏の多い人生だったかと思えます。その中でももしかしたらそのゴーストに出会うための人生旅行をしていたのかなというように、人生振り返りますとそんな印象さえ感じられるかと思えます。

八雲が最初にふしぎな物語を聞いたのはいつかと言うと、おそらく八雲自身の記憶も曖昧なよ

うな小さな頃だったと思います。ギリシャにいた2歳までの記憶なんですけども、レフカダという島で生まれております。英語名はラフカディオ・ハーンですが、そのラフカディオという名前も島の名前からきています。この地図で言うと、これがレフカダ島です。ほとんど今は本土と橋でつながってしまっていて、陸続きになってますけども。イオニアの島々と八雲はちょっと関係がありまして、まずこの島で生まれたんです。そして八雲の母親ローザはキシラ島という島で生まれています。八雲の最愛の人、母ローザはこの一番北にあるコルフ島という島で亡くなってるんです。これがおそらくイオニア海で八雲が最初に眺めた海、子どもの頃、毎日眺めていた海の風景なんです。ギリシャをご存知の方もいらっしゃると思いますが、エーゲ海とイオニア海って色が全然違うんです。イオニア海はこうした乳白色ですが、エーゲ海はもっと濃いブルーをしています。レジュメの1のところにありますけれども、母の思い出と思われる文章を八雲はこういうふうに綴っています。『私はある場所とある不思議な時を覚えている。その頃は日も月も今よりもっと明るく大きかった。それがこの世のことであったか、もっと前の世のことであったかは定かではない。』そして下から5行目ほどのところですが、『昼が過ぎて月が出る前のたそがれ時、大いなる静寂が大地を領すると、その人はいろいろなお話を聞かせてくれた。頭のてっぺんから足の爪先まで嬉しさとぞくぞくするようなお話を。それからたくさん物語を聞く機会があったが、それも皆美しさにおいて、その人のお話の半ばにも及ばない。嬉しさがこらえきれなくなると、その人は不思議な短い歌を歌ってくれた。それが決まって眠りへ誘う歌だった。』おそらくこれは、このイオニア海のほとりで彼の母が語ってくれた何だかの物語ではないかなと思われると思います。

もうちょっとレフカダの風景を見ていただきますが、イオニア海はこのような潟湖のような風景になっています。ちょっと浜名湖とも似た所があるかも知れませんが、松江の宍道湖とも大変よく似ています。これレフカダの夕陽なんです。このように決して外洋な風景ではないんです。ちなみにこれが日本で初めて暮らした松江で、八雲は宍道湖を大変愛したんですけれども、非常によく似ています。偶然と言えば偶然なんですけれど、おそらくどこか潜在的にレフカダの風景が刻まれていたのかなという気が致します。これが八雲の生まれた家のある前の通りなんです。「ラフカディオ・ハーン・ストリート」という名前になってしまっていて、今有難いことに八雲のファンのレカチーナ・パトラさんという夫妻が家を大切に守ってくれています。「ラフカディオ・ハーン通り六番地レフカダ」というのが正式な住居表示です。それからもう一つ、先ほどちょっと申しました八雲の最初にまつわる不思議な物語を語ったと思われる母ローザが生まれた島は、このキシラ島というもうちょっと南にあるイオニア海の島なんです。この写真にちょっと写っていますが、この家がローザの生まれた家です。これは去年撮った写真なんですけど、去年この家がリノベーションされてきれいになりまして地域資源として公開されるようになったんです。その話はまた後で致します。ちょっと南のほうでもうクレタ島に近いので、同じイオニア海でも少し海が濃いブルーに見えます。ローザの家の前には美しいこんな海が広がっています。

そしてさらに家をちょっと見上げますと城塞があります。このイオニアの島々って当時はほとんどがイギリス領だったんです。このキシラもレフカダもそうです。だからイギリスの陸軍が駐留していました。その軍医として赴任していたのがチャールズ・ブッシュ・ハーンという、後に八雲の父親になるアイルランド人の軍医です。ここでローザと二人は恋に落ちるんです。当然ながら、この城塞のすぐ下の家の娘ですからどっかで出会ったんだと思います。そして結婚したわけです。ローザは必ずしも幸せな人生ではなかったかと思いますが、それでも。

昨年（2016年）の5月ローザの家を今度は観光客にも見てもらいたいということで、オーナーの方がリノベーションされました。新しいこのキシラ島の地域資源にしたいと、オープニングのセレモニーもありました。飛び入りでギリシャの文化大臣も来て下さりまして、これも日本とギリシャを結ぶ新しい文化交流の拠点になるというような、そんなスピーチをされました。嬉しかったのはローザを慕って地域の方が150人も集まってくださったことです。600人しかいない集落なんですけれども、そんなに人が来て下さったというのが何より嬉しかったです。家でこんなパーティーが行われてまして。私もびっくりしたことに、ここで偶然の出会いがありました。このレディーガガみたいな方が写っていますでしょ。彼女は僕と親戚だということが分かりました。ローザが後に再婚したんですけれども、その再婚者との間の子孫なんです。何となくローザのイメージが湧いてきました。この方は非常にデリケートで完璧主義な方なんです。ローザは最後は精神科病院に入院して亡くなってらるんですが、今までの伝記作家はみんな「ローザという女は無学文盲で感情的な女でとんでもないやつだ。4歳にして八雲をアイルランドに残して自分はさっさと帰って来て再婚して」と、そう言われてきたんですが、地元の人が伝えている伝承は全然違うんです。ローザは誰よりも高い教育を受けていて、しとやかでアイルランドに残してきた息子のことが気になってついに自分でアイルランドまで会いに行っただけで会わせてもらえなかったんだとか。全然違うことが伝わってる。それはどちらが真実かはともかくとして、そういうふう地域の方たちが一つのプライドとして語り継いでいることを大変嬉しく思っています。

八雲にとって最愛の人であるローザの写真が残念ながらこの世にないんです。（このローザの肖像画を）描いて下さったのは島根県出身の安野光雅さんという画家で、八雲の愛読者です。2010年のことですが安野さんがキシラ島まで行って、当時90代の3人の老人がローザの写真をかつて見たことがあるっていう人だったんです。この3人から聞いてイメージしてローザの絵を描いて下さいました。日本に帰って来てから「凡さん、あげるよ」って下さったんです。僕にとっては何よりのプレゼントでした。

そして八雲2歳の時にアイルランドに移るわけなんです。これが当時のアイルランドの「グラフィトンストリート」という、ダブリン市内の一番賑やかな通りです。今も大変賑やかな通りなんですけれども、当時、八雲の父の実家がこのダブリンにあったんです。ちょうど今年（2017年）は日本とアイルランドとの外交関係樹立60周年になるので、これから様々な両国を結ぶイベントが開かれることになっています。今年の7月には狂言で京都の茂山千五郎家が小泉八雲を原作に、おそらく『ちんちん小袴』になると思うんですけれども、新作狂言を作ってアイルランドで公演するというような予定もごございます。

アイルランドはご承知のようにヨーロッパの中では珍しいケルト民族の国だといわれています。ケルト民族は日本の弥生時代ぐらいまではヨーロッパの広い範囲に渡って東はトルコぐらいまで住んでいました。けれども、だんだんローマの力が強くなってローマ人に侵略され、さらにはゲルマン民族が移動を始めて住み場をなくして少しずつ時間をかけてヨーロッパの最西部のほうに移っていったといわれています。今ケルト民族が住んでいるところはアイルランドとマン島、そしてイギリスのスコットランドとウェールズとコーンウォール、フランスのブルターニュ半島、スペインのガリシアなどヨーロッパの辺境地帯ですね。各地の辺境地帯へと散らばってはいますが、ケルト民族は非常に古いキリスト教以前の伝統文化を今でも持ってるんですね。特に妖精信仰が非常に強くあるんです。アイルランドはこの左側ですけど、大体北海道と同じぐらいの大きさです。そして八雲はここで大叔母にあたるサラという人に経済的に養育されるんです。先

ほど申し上げたように、八雲が4歳の時に母ローザはギリシャとアイルランドの違い、カルチャーショックがもとで母国ギリシャに帰ってしまったためです。当然、気候も違いますし、ギリシャのキシラ島とアイルランドのダブリンとはおそらく沖縄とサハリンぐらい気候が違うんです。天気も悪い。当然ながらですね。そしてギリシャ正教とカトリックでは違う。さらに英語とギリシャ語、とても通じないということでギリシャへ帰ってしまうんです。孤独な日々が八雲にとっては始まるわけです。

今も2軒ほど家が残っていますが、このアッパー・リースン通りの家に住んでいる時に、しばしば八雲はおばけの幻を見るんです。「わーっ」で叫んだりするんです。決定的な体験をするのはジェーンという、いないはずの女性の姿を見てしまうんです。ジェーンと呼びかけると彼女は振り向いてくれたんだけど、何とその顔は目も鼻も口もないのっぺらぼうだった。気絶して階段から落ちたといわれていますけれども、その体験をしっかりと怪談『貉』という作品のなかに活かしています。『貉』は赤坂紀伊国坂ののっぺらぼうの話です。あの最後の部分は、もとの百物語には全く出てこないです、のっぺらぼうなんていうのは。これは八雲のこの家での体験を上手くこの再話する時に活かしてるんだらうと思われまます。そして八雲はアイルランドの少し田舎（南部のトラモア）に行った時に、あるいは西部のcongというところにいった時に、熱心なカトリック教徒の大叔母の目を逃れて乳母のキャサリンという人からたくさんのゴーストストーリーやフェアリーテイル（妖精談や怪談）を聞くことができたんです。これが多分、少年時代の八雲にとって至福の時だったと。ただ、その時どんな怪談を聞いたのかは残念ながら八雲も書き残していないし分からないんです。

八雲がダブリンに行ったのは今から160年ぐらい前ですけれども、ただこれだけ経っても、八雲がアイルランドで子どもの頃に聞いたという話が二つほど我が家に伝わっています。それを僕は父から聞かされまして、決して怪談というわけではないのですが、世界的にある昔話です。

一つは『三つのお願い』っていう話です。ちょっとこれは短いからご紹介します。『アイルランドの田舎によく夫婦喧嘩をする農夫婦がいた。クリスマス前に神様が現れて、お前たちはよく夫婦喧嘩をするけれども、よく真面目に働いてきたので今日は三つだけ願いを叶えてやる。何でも欲しいものを言えと言った。まず、ご主人が「今日はソーセージが食いたい」と言ったらソーセージがぱっと目の前に現れた。そしたら奥さんが「あんたはなんて馬鹿な人なの。どうせならお金がいっぱい欲しいって言えばいいのに」と言ったら、今度はご主人が怒って「お前みたいな貪欲なやつには鼻にソーセージつけてやる」と言った。途端に奥さんの鼻にソーセージがぼんっとなついて、二つ願いが叶っちゃったんです。泣く泣くソーセージを奥さんの鼻から外してもらって三つ目の願いが終わってしまった』という、そういうお話なんです。

こういう他愛もない昔話が我が家に伝わっているんですが、これもおそらく間違いなく乳母が八雲に伝えた話で、乳母がどんな人だったかっていうのが最近分かったんです。これは八雲自身が書いた手記がアメリカのバージニア大学で見つかったからです。その時初めて名前もキャサリン・コストロという人だっというのが分かりました。あまりアイルランドっぽくない名前ですよ。多分イタリアから13世紀ぐらいにアイルランドへ渡って来た一族だと思います。この乳母は今まで違う名前と言われてたんです。「ケイト・ローランド」って。普通キャサリンというのは愛称名で言うとケイトになるんですが、八雲が言っているように『誰もこの私の乳母のことをケイトと呼ばなかった。キャサリンと呼んでいた』ということなんで、実は二人は別人なんです。二人キャサリンっていう名前の使用人がいたということなんです。

そして、こういう手紙も 17、8 年前に伊豆で見つかっています。これは晩年の八雲が 1901 年に東京からアイルランドを代表する詩人、ウィリアム・バトラー・イエイツに書いた手紙です。この人はノーベル文学賞を後にもらいますが、詩人だけであるわけではなくて戯曲も書き『鷹の井戸』なんていう日本の能の名作も一つ書いています。さらには妖精伝承の収集家としても知られていて、柳田國男が『遠野物語』を書くにあたって大きな影響を与えた人でした。柳田國男は『遠野物語』を書く前にイエイツの『ケルトの薄明』という本を読んでいます。そうしたら、アイルランドにも座敷童と同じ妖精がいるじゃないか。びっくりして感激して『遠野物語』を語った話者、佐々木喜善にそういう手紙も残していますが、多分イエイツを日本で最も早い時期に紹介したのがラフカデディオ・ハーンでした。このイエイツが出て、こんな手紙なんです。『しかし 45 年前に私はやんちゃな憎らしいような少年で、でも心にひびは入らなかった。そして、ダブリンのアップー・リースン通りに住んでいた。そして、私にはコナハト出身（アイルランドの北西部の地域名で、最も古いケルト文化が残っている地域）の乳母がいた。乳母は私にフェアリーテイルやゴーストストーリーを語ってくれた。だから私はアイルランドの事物を愛すべきだし、また実際愛している』と。今まで「八雲はアイルランドが大嫌いだった」と言われてきました。確かにパトリックっていう名前を持ちながら、それをあえて捨て、一文無しでアイルランドを脱出してアメリカへ移民しなければならなかった。自分がもらえるはずのお金を全部親戚や父親が使ってしまったっていうのは、そういう恨みがあったと思うんですが、でも、やっぱりアイルランドの事物に対しては愛情があったっていうことなんです。アイルランドのどういう部分かというと、ゴーストストーリーではやっぱりフェアリーテイルなんです。妖精と、ケルト民族がキリスト教以前の伝統的な文化を持ち続けてきたアイルランド、そういう部分のアイルランドが好きだったっていうことです。この手紙が出てきて、ほんとに私も嬉しかったし安心しました。

去年（2016 年）6 月にもアイルランドで「小泉八雲庭園」というのがオープンして、これも新しい地域資源になりました。このオープニングに出掛けまして、夏至の日で、夜 9 時頃なんですけどまだ明るかったです。西部にスピダルという小さな村がありまして、そこにオシーン・オコナーさんという方の家（たまたまですが友達の友達の家）にうかがいました。ちなみにオシーンという名前はアイルランドの男性名に多いです。浦島太郎と同じような話がアイルランドにもあって、オシーンというのはその主人公の浦島にあたる人の名です。「子鹿」っていう意味のケルト語なんですけれども。この人の家では、夏なのに泥炭の暖房がたかれています。この周りに集まってきて皆で楽しむという文化はまだアイルランドの西のほうには残っています。おそらくこの泥炭の暖房がいいんですね。あんまり熱くないですよ。何となくぬくもってくる。自然にここに集まってきてお話が始まる。私が行った時も「ちょっとあなたが来る少し前に庭に突然白い馬が現われたのよ」って言われました。アイルランドで白い馬っていうのは異界とこの世を結ぶ乗り物なんです。さっきのオシーンというお話は、日本では竜宮城へ亀が連れてってくれますけれども、アイルランドでは白い馬がオシーンを竜宮城へ連れてってくれる。竜宮城は「ティル・ナ・ノグ」というんですけれども。そういうふうに関係世界と物語の世界が必ずしも完全に分かれてないんです。アイルランドっていうのは。だから、そういう国だと思います。今でも国土の 3 分の 1 ほどが泥炭で覆われています。

アイルランドの道路標識ですが、ご存知ですか？「レプラコーン・クロッシー」。レプラコーンっていうのは、これはアイルランドの一番ポピュラーな妖精なんですけれども。靴直しをする妖精です。このちっちゃいおじさんの妖精がここを渡るから車は一時停止しなさいっていう、そうい

う道路標識ですね。アイルランドの年配の人は、今でも人によっては「フェアリーなんて失礼で言えない。グッド・ピープル（＝良い人たち）」というふうに妖精のことを呼ぶそうです。そういうところにゴミを捨てたりとか、そういうところに生えてる草を抜いたりとかもそういう行為をしない。沖縄の人たちが御嶽に対する思いとちょっと似たところがあるのかなと思います。アイルランドの人にとっても、妖精というのは、水木しげるさんじゃないんですけども、決して美しいものではなくて、むしろ水木さんはさすがに本質を描いてるなと思うんですけども、むしろ気味が悪い畏怖の対象となるものなんです。それを19世紀後半の妖精画家といわれる人たちが、イギリスの貴族の女性の要望にあわせてこういう美しい妖精を描くようになってから先入観ができてしまうんです。「妖精は可愛いものだ」、と。今でもアイルランドはこのように色んな不思議なものがあるんです。2005年にここを通った時にアイルランドのバスの運転手さんがハンドルから手を放して木に向かって合掌されました。今でも「樹木には精霊が宿る」という信仰が残っているためです。ケルト民族より先に住んでいた先住民が作ったストーンサークルがあって、これを「フェアリーリング」なんて呼んでいます。この塚の中に妖精の世界があるというふうに考えているんですね。

八雲が子どもの頃『ひまわり』という作品を書いていて、従兄のロバートと一緒に妖精の輪を探したということを回想した文章があります。八雲は後に怪談を70話以上も生涯で再話しますが、その大きな原動力は、やはりヨーロッパの中でも独特なアイルランドという国で生まれた（影響を受けた）に違いないと思います。それからちょっと言い忘れましたが、先ほどのオシーン・オコナーさんという家に行きましたが、オシーンさんと話したら「僕のおばあさんの名前はキャサリン・コストロという名前だよ」と言われました。八雲の乳母と同じ名前だと思ったんです。「実は近くにコストロ村という村もあるから行ってごらん」と言われました。そこへ行ったら全村コストロという姓なんです。おそらく八雲の乳母もそういうところから来ていた人なんだろうなと思いました。それも偶然が重なってそういう場所にたどり着いたんですが、大変面白かったです。これは松江の荒神さんですけども、水木さんが大好きだった場所です。樹齢600年のすだ椎の木で、ご神木です。八雲はこういうご神木を愛したんですけども、やはりアイルランドでの文化環境との共通点を感じながら、出雲の文化を見ていたんだろうなということが分かります。

ちょっと話を進めます。八雲はその後、左目を失明したり、様々な不幸に遭います。家が破産をしまして一文無しでアメリカのシンシナティに渡り、ここで最初は赤貧の生活を送った後、ようやく24歳でジャーナリストとしても書きをスタートさせます。その時、マティ・フォーリーという混血の女性と恋に落ちるんですが、彼女は語り部だったんです。ほんとに八雲の身近には常に語り部がいたんです。ローザにしてもそうだし、キャサリン・コストロにしてもそうだし。アメリカのシンシナティではこのマティです。シンシナティというのはアメリカの南部と北部の境ですので、南部の黒人奴隷たちが虐げられてその怨念がこもったたくさんのホーンテッドハウスがあるんです。そういう話をマティは八雲に聞かせました。それが後に新聞記事になっていきます。恋に落ちて結婚しますけれども、実は当時のオハイオ州の法律では有色人種と白人の結婚は認められていなかったんです。これが仇になってしまって、せっかく得た仕事を解雇されるということになって、八雲はニューオリンズへと移っていきます。

ルイジアナ州のニューオリンズも面白い街でして、フランス人たちが「新しいオルレアン」（フランスの中部にある都市名にちなんだ名称）ということで植民した街です。元々、チョクトーインディアンと呼ばれるネイティブアメリカンが住んでいるところにフランス人が街を開き、さ

らに郊外では綿花のプランテーションに多くの黒人奴隷たちがカリブ海の島々や西アフリカからやってくるわけです。そしてここで文化が接触・融合して様々なクレオール（植民地圏で生まれた白人）文化という混交文化が開花しますが、そのこの辺りに八雲はすっかり惹かれてしまうんです。これが八雲の住んでいた家で、ここでも嬉しいことにリチャードさんというご夫妻が八雲のファンで、しっかりと家を守ってくれています。ニューオーリンズでは宗教が接触して融合してあるんです。西アフリカの民族信仰「ブドゥー」という大変呪術的な宗教が黒人たちによってもたらされて、カトリックと出会い、ここで定着して根付いていくんです。当時、ブドゥー司祭といわれたのはマーリー・ラヴォーなのですが、すっかり八雲はこの人と仲良くなりまして毎晩のようにマーリー・ラヴォーのもとに通って怪談を聞いた。あるいはブドゥーの呪術についての話を聞いています。一説には、二人は愛人関係だったというふうにも言われていますけれども、真相はよく分かりません。

そして、八雲はニューオーリンズからもっと南のマルティニークというカリブの島に移っています。カリブ海のちょうど真ん中辺りになるんです。このフランス領の島に2年間住むわけです。ここも当然クレオール文化なんですけれども、ここでシリアという女中さんと一緒に暮らすんです。シリアからマルティニークのゾンビ信仰について話を聞くわけです。ちょっと紹介しますとレジュメ2ページ目の4というところに書いてあります。八雲のシリアについての記述をご紹介しますと、『シリアの私に対する心づかいは衛生、食事の日常茶飯事をこえて、不確かな霊的な世界にまで及んでいる。彼女は妖術師とか魔女、ゾンビの力で私の身に何か起こりはしないかと、それを大いに心配している。ことにゾンビのことを心配している。シリアのゾンビに対する信仰は議論の余地なんかないほど堅いものがある。ある意味で遺伝的なもの、人種的なものである。田舎では日が暮ればいつでもゾンビが出ると信じられている。都会では朝の2時から4時の間がゾンビの出る時刻だと考えられている。』例えばゾンビって色んな意味で使われるようですが、マルティニークなんかでは蟹が道路を横切ったりすると「あれもゾンビだ」と。犬がやって来ると「あれもゾンビだ」とか人々は言うらしいです。シリアもまさにそういう女性だったんです。こういう語り部がマルティニークでは八雲に怪談を語り聞かせたわけです。

そしてこれをちょっと見ていただきたいんですが、八雲自身が撮ったと思われる、マルティニークで撮ったと思われる写真なんです。あんな目が悪い人なので、もしかしたら途中からプロのカメラマンを雇ったかも知れませんが、島に行く前にニューヨークでカメラを買って、それでパチパチと写しています。これは今から35年ぐらい前に東京の私の家の押入れの中から古い鳩サブレの缶が見つかったんですけれども、その中に入ってたんです。このような写真が45枚ほど入ってました。そんな写真なんです。ここではこういった住民なんかに密着取材をしましてまさにフィールドワークをします。人類学者のような生活をしています。

そして39歳で日本へやって来ます。元はジャーナリストとしてやって来ますけれども、日本にとりあえず住むということを考えて松江で英語教師になるわけです。そして松江で出会った女性の小泉セツです。後に正式に結婚するわけですが、私の曾祖母になりますが、この小泉セツがやはり語り部だったんです。このセツが八雲に『鳥取のふとん』という哀れな怪談話があるんですが、これを語った時に、八雲は「あなた、私の手伝いできる人です」というふうに言ったんです。そしてほんとにセツの語りから怪談を再話していく。再話っていうのは「再び話す」と書きます。平井呈一さんという方が作った言葉だと言われますけれども、元々の原話に文学としての魂を吹き込んで八雲は英語に翻訳していくっていう、そういう作業なんです。このセツが

こんなことを回想しています。レジュメの5番のところになりますけれどもちょっと紹介します。『淋しそうな夜、ランプの心を下げて怪談をいたしました。ヘルンは私に物を聞くにも、その時には殊に声を低くして息を殺しそうにして私の話を聞いているのです。その聞いている風がまた如何にも恐ろしくてならぬ様子ですから、自然と私の話にも力がこもるのです。私が本を見ながら話しますと、本を見るいけません。ただあなたのお話、あなたの言葉、あなたの考えでなければいけませんと申します故、自分の物にしてしまっていなければなりませんから、夢にまで見るようになって参りました。』

実は八雲の『怪談』が生まれたのには随分セツの貢献があったんですね。八雲の日本語能力って凄く低かったんです。自分で日本語の本が読めるような人ではなかったです。新聞も読めなかった。ただセツの語りによれば、かなり難しいニュアンスの日本語でも理解することが出来たんです。セツが、八雲が分かりやすいような言葉を用いて、言ってみれば「ピシン言語」みたいなものを使って、「私、パパさん、会える、なんぼ喜ぶ」とか、そんな言い方で二人で会話していたんですけれども、怪談を語ったのがあのような作品になっていくわけです。「本見るのいけません」っていうのは口承文芸の柔軟さって言うのかな。そういうものを八雲は大事にしてたんじゃないかなというふうに思うんです。

これは八雲の作品で特に有名な『耳なし芳一』の、日本で唯一の自筆原稿なんですけれども、松江市立中央図書館にあります。ちょっとこの大きな2番の、「八雲が見た超自然文学の意味」っていうのがあるんですけれども、ちょっといくつか紹介したいと思います。まず伝説について八雲は、『夏の日』という作品で述べているんですけれども、とにかく千年という長い月日を生き続けてきた伝説だ。しかもその伝説が昔からそれぞれの世につれて、ますます新しい魅力を加えてきた説話であってみれば、なにかしらその中に真理を含んでいればこそ、長く生命を保ってこられたんじゃないかと。「伝説には真理、truthがある」っていうふうに言ってます。さらに晩年は「怪談にも truthがある」って言ったんです。これは東大の授業で学生たちに向かってこう言ってるんです。『どんなに知識が増えようと世界は依然として超自然をテーマとして文学に歓びをみだす。この先何百年たとうがそれは変わらない。霊的なものには必ず一面の真理があらわれている。だからいわゆる幽霊の存在が信じられないとしても、それがあらず真理に対する人間の関心まで小さくなったりは決してしない。』こういうふうに予言したんです。

多くの方がこの不思議文学を考えるシンポジウムに来ていただいているっていうのを見ると、やっぱりこの八雲の言葉は当たってるんじゃないかなというふうに思うんです。怪談には真理があって、その真理に対する人間の関心は、おばけや幽霊が信じられない時代がきても変わらないんだということを学生に向かって当時言ってたんです。さらにこんなことも言ってる。「人生に生きる目的を与えてくれたのはゴーストです」って。「生きる目的、自然を畏怖することを教えてくれた。ゴーストもエンジェルもデーモンも今はもういません。この世の中は電気と蒸気と数字の世界になってしまいました。それは味気なく空しいことです」と言ってます。今から見れば電気と蒸気と数字ってアナログでいいなと思うんですけども、当時の最先端の物質文明だったわけですね。八雲が熊本にいる時の、ちょっと嘆息が聞こえてきそうなそういう手紙なんですけれども。

その八雲が言う「超自然の物語の中の真理」って何かっていうのは私も分かるような分からないような感じだったんです。でもちょっと最近、こういうことかなと思いはじめたんですが、これは八雲が大好きだった怪談話が伝わっている松江の大雄寺っていう法華宗のお寺です。ここには

こんな怪談があるんです。「大雄寺の前に鉛屋さんが毎晩、顔が青白い白装束の女が水飴を一瓶分だけ買いに来た。三晩続けて来るんです。二晩目に手招きする。手招きに応じて友達と一緒に怖いからその女の後をつけて行くと間もなく彼女は大雄寺のある墓地のところで消えた。そして墓石のところで消えた。しばらくすると地面の中から赤ちゃんの泣き声がするんで慌てて墓を掘ってみると、なんと元気な赤ちゃんが提灯の灯を見て笑っている。そして毎晩水飴を買いに来ていたお母さんの軀があった。」八雲はそこで最後に一行加えてるんです。伝承怪談では実はその墓から生まれた子は近くの人にもらわれて幸せに暮らしたっていうくだりがあるんですけど、それをカットして八雲は『母の愛は死よりも強し。』そういう一行を加えたんです。これつまり再話なんですけれども。この『子育て幽霊』って全国ほとんど47都道府県にある話なのですけども、八雲が子育て幽霊から汲み取ったその真理、turthというのは「母の愛は死よりも強い」なんだっただろうと思うんです。もちろん八雲の自分の境遇にも照らしてだと思っただけなんですけれども。

私は2011年の4月（東日本大震災発生直後）に石巻にお見舞いに行きました。何故なら石巻にも「みちのく八雲会」という有難いことに小泉八雲の愛好者の会がありまして、全員が被災されたのでお見舞いに行ったんです。そうしたら、「ちょっと見てって」ということで、被害の酷かった南浜の門脇小学校っていうところに連れてかれまして、まだ瓦礫の臭いがブンブンと漂っている中で、あなたが来る少し前にここから若いお母さんの遺体が発見されたって言った。そのお母さんはなんと赤ちゃんをしっかりと抱きしめたままこの瓦礫の中に埋もれていた。その話を聞いた石巻の市民がまた涙を流しましたよっていう話を聞いた時に、ほんとに「真理」というからには時空を超えて変わらない本当のこと、そういうものがやはり怪談の中にはあるのかなっていう、そういう気が初めてしたんです。八雲はそういうものを伝えたいっていうことも怪談を再話する作業の中にはあったんじゃないかなっていうふうに思います。

それから、もう一つはそういった超自然の文学は想像力の源になるっていう、そういう思いもどうもあったように思います。八雲は特に、水木さんもそうですけども、アンデルセンを大変尊敬してたんですね。日本に来てからもアンデルセンの本を買い続けていました。子どもの教育にもアンデルセンを使っていたんですが、レジュメの丸4にあります、『アンデルセン、この人は何という偉大な技術を持った人でしょう。アートを持った人でしょう。空想の量的莫大さ、魔術の素朴さ、驚くほかない圧縮力。これは単なる文学的技術ではありません。私はその泉に掬って学びたいものと思っています。』と。八雲はアンデルセンの偉大な想像力に憧れていて、自分も日本でアンデルセンのような仕事をしたいというふうについていたと思っただけなんです。

長男の一雄って私の祖父なんですけれども、これが10歳まで小学校行かせなかったんです。何故かと言うと、八雲はやっぱり教育者でもあったんで日本の教育はいいんだけども気になることがある。記憶力偏重の教育でイメージネーション、想像力を十分育んでない。それならば家で教えたほうがいいっていうことで、ホームスクーリングするんです。10歳まで。だから、自分が忙しくなっちゃって、八雲の早死の原因の一つはこの息子の教育に時間を大いに割いたことかと思っただけなんです。1日3時間、息子の教育に割いていたんです。こういうあえて粗末な机を買ってきて、帰ってから90分座らせて英語を中心とした、ほぼアンデルセンとかアンドルー・ラングというイギリスのやはりフェアリーテイルを編んだ人たちです。アンデルセンの童話集ありますけれども、そういったものを利用して想像力を育む。あるいは、民話を通した総合教育ということの家

でしていたんです。私自身も中学生の時までこの机を使っていたので、天板がたがたなんですけど。すごく懐かしいものです。

これは一雄が授業で使っていたアンデルセンの作品集です。八雲の蔵書は全部、富山大学にあるはずなんですけど、この十数冊はまだ我が家にあるんです。何故かと言うと、一雄が「これはパパが僕のために買ってくれたものだから、富山大学に渡さなくていいんだ」って勝手に屁理屈を言って富山大学に一括お渡ししたはずなのにそこから抜いていたものなんです。それだけ思い入れが強かったのかなと思います。この書き込み、ご覧いただけますか。これ八雲の字なんです。カタカナで色々書いてあります。ちょっと幼稚っぽい字ですけども。これは一雄に教えるために予習してたってということなんですね。一雄がまたこのテキストを使って後に高校で英語教師になるんですが、その時に使ったって言う。面白いですね。これはアンデルセン童話集の中の『しっかり者のスズの兵隊さん』っていうお話で、この話が一雄は大好きでした。特にこの話は好きで、鉛の兵隊さんを実際にも買ってもらったようです。せがんで。私の父もまた一雄にせがんで鉛の兵隊さんを買ってもらったんですけども。こんな本が何冊か残ってまして、そのアンデルセンの最後のところに八雲がこういうことを書いてあります。『難しいことをすれ』って書いてあるんですけども。確かに7、8歳の男の子にアンデルセンはちょっと難しいですよ。想像力だけではなくて、難しいことに挑戦しようって言うことなんです。アンデルセンの講読を通して言いたかったのかなと思います。

最近、松江の記念館に寄贈されたんですが、八雲は優秀な学生っていうのはベスト・イングリッシュじゃなくて、ベスト・シンキングだと、最もよく思考した学生に本を送ってたんです。それがやっぱりアンデルセンの本だったんです。横木富三郎さんという八雲が愛する学生に送った本が、このご子孫の方から比較的最近寄贈されました。そういうことで八雲は、やはり「語りの世界で人間って想像力を育んでいくんだ。異界と共生できる社会はやっぱり幸福な世界なんだ」ということを思っていました。そういう意味では人間中心主義ではない人だったように思います。

そろそろ時間が後半に差し掛かりますので、これから実際どういうふうにもこのような八雲と『怪談』の世界を今地域で活かしているかっていう、私の知る限りのわずかな事例ですけどもお話させていただきたいと思います。まずは松江なんですけれども。松江市では2008年から「松江ゴーストツアー」というのをやっております。レジュメのデータが古くて現在は291回までいってまして、のべ4,797人の方にゴーストツアーに参加していただいています。これは実際どういうことやるかっていうと、日没の時間に松江城に集合していただきまして、プロの語り部の話を聞きながら2時間、松江城下を歩くという、そういうツアーです。何てことないんですが、非常に手軽と言えば手軽です。お寺の入館料以外、一切お金も発生しないような、そういうゴーストツアーなんですけれども。

そして、それだけだと歩ける範囲が限られてますので、年に数回はバスを使って「ミステリーツアー」というのもやっております。例えばこんな感じなんです。日没後、歩いていきますと、松江って夜暗い町ですので、ただでさえ暗いんですけども、月照寺というところがあるんです。八雲は「自分はこちらへ埋めてほしい」って言ったんですけども、ほんとに暗いお寺です。殿様の墓があるところです。松平藩の菩提寺なんです。ここに亀の頭が見えてます。亀の巨大な碑があって、これが夜になると市中を暴れ回ったという都市伝説を八雲が紹介してます。ここでこの話を聞くとちょっとぞっとするんです。ほんとと真っ暗。闇夜。都会から来た方が体験していただいています。そして最後、大雄寺では最も好きだった、さっきお話した『子育て幽霊』の話を聞いてい

ただくと多くの方が涙を流して下さるんです。怪談ってそういう部分もあるんだなと思います。特に八雲は単なるホラーだというよりもそういったちょっと感動を覚えるような、そういう話が好きだったんだろうと思いますけども、現代のこういった観光で来るお客さんもほんとに感動して下さるんです。

このような企画を提案させていただいたきっかけになったのはアイルランドの「ダブリンゴーストバス」なんです。私は 2005 年にこれに乗りましたけれども、このチケット買うのがそもそも大変なんです。朝一番で並んですぐ売り切れる。ダブリンでは每晚 8 時にこのツアーが始まって、約 2 時間バスで怪談ゆかりの場所を巡ります。ダブリンにももちろん怪談がたくさんあるんです。プロの語り部の話が素晴らしいんですが、それだけじゃなくて、ここで「ブラム・ストーカーが住んでたんだ」とか、色々アイルランドの資源である文学の知識も同時に教えてくれる。文化探訪ツアーとしても素晴らしいなと思います。さらに八雲が住んだニューオリンズに行きますと、こういうふうにゴーストツアー専門の旅行会社がいくつかもうすでに存在してまして、「ホーンテッドミステリーツアー」っていうのは専門の旅行会社で、しかも 5 種類もあるんです。怪談を聞くツアーと吸血鬼伝承を訪ねるツアーとブードゥー教ゆかりの地に行くツアーと、お墓に行くツアーと、それからガーデンディストリクト地区という住宅街に行くツアーと 5 種類も每晚やってるんです。これはお墓ツアー。昼間ちょっと治安が悪い関係もあり、昼間も行いますけれど、お墓のツアーもあります。

そういうふうに結構、世界各地でこういった「かたちのない怪談を活かすツアー」っていうのが行われていまして、先ほど申し上げたニューオリンズではグレイライン社という比較の大手の旅行会社の支社長さんだけがインタビューに応じてくれたんですが、社の収入の 5% から 10% はゴーストツアーによるものだと。これからもっと拡大しそうだって言われました。帰ってきて JTB の方に話したら、「5 から 10 なんて信じられない」って言ってました。日本では凄い高いということの意味で信じられないっていうことです。

今、実は観光のスタイルが変わってきました。昔は「発地型観光」だったんです。旅行会社が行って帰ってくるまでのプランを決めて、しかも有名なガイドブックとかに出てるようなところを計画的に巡ってくる。しかも概して団体旅行が多かった。今は、そうじゃなくて、少人数で目的嗜好で、しかも東京で予約するんじゃなくて現地に行ってから体験型のツアーを予約してできるだけ地元の人と同じような立場で喜怒哀楽を共感できるような立場でツアーを行うっていう、そういう「着地型観光」といわれる観光が主流になってきたんです。これらのゴーストツアーはみんな着地型観光なんです。松江では NPO 法人、松江ツーリズム研究会が主催してるんですが、こんな感じで見ていただきますと、最初はどうかと思ったんですけど、やっぱりほとんど島根県内の人に来てくれてたんです。感想を聞きますと、「夜の松江を歩いたのは初めてだし、こんな松江にも面白さがあるんだ」というのを感じていただいたわけなんです。そして 4、5 年経つうちに県外者が 8 割ぐらいになってきたんです。今嬉しいことにほとんど夏場の土曜日しかやらないんですけど、東京都の方が一番多いんです。参加者が。わざわざ社員旅行をその日に合わせて組み立てるという方も出てきたのと一度も赤字を出してないっていう極めて珍しい着地型観光になっているということです。実は収益性が高いっていうメリットがあるんです。怪談には。ビジネスと結びつけたくないんですけども、実はそういうこともあるんです。

去年 (2016 年)、小泉八雲記念館がリニューアルオープンを 32 年ぶりにしたんですけども、やはり今企画展示室では怪談の、こういう展示会をしています。『再話文学の永遠性』という展

示会です。確かに『怪談』ほど八雲の著作の中で色んな言語に訳された本はないと思います。まずはギリシャ語とトルコ語です。例えばイヌイット語なんかにも翻訳されています。それだけ普遍性があるということだと思いますし、世界中の人が怪談に魅了されるんだろうと思うんです。

ここからお示するのは豊橋からも比較的近い焼津です。静岡県焼津は八雲が晩年6回も夏を滞在しました。非常に思い入れが深かったところです。ご承知のように焼津には10年前に焼津小泉八雲記念館ができていまして、私も名誉館長を務めさせていただいてるんですけども。ここでも毎夏、子どもたち向けに「焼津ゴーストツアー」というのをやっています。ここにありますように、すでに4回やっているんですけども、八雲の作品に出てくるゆかりの地や焼津で元々、怪談話が伝えられている、そういう場所と一緒に子どもたちと歩くんです。ちょっと課題もありまして、子どもたち忙しくてなかなか夏休み中であっても集まりにくいことがあるんです。なんですけれども、一回来てくれた子は同じく焼津市がやってる文芸作品コンクールにほとんどの子がその時の感想を応募するんです。それがまた入選作となつてと、ツアー一回で終わらないということなんです。一種の地域教育にもなっているのかなというふうな気がしています。

もう一つ、今焼津では静岡県立大学の細川先生っていう方が中心になって静岡県立大の学生と焼津の小泉八雲記念館と焼津の観光協会が連携して「焼津&八雲 Y.Yプロジェクト」というのをやってまして、始動したばかりなんです。これから様々なグッズが生まれようとしているところで、今年中にいくつか生まれるようです。こういった大学、地域との連携も今盛んになりつつあります。松江でも私の勤務先ではやはり「ゴーストみやげ研究所」というサークルができて、そこまで学生たちが色々新しい物を今作っています。つい先週も『芳一リターンズ』って耳なし芳一の1年後っていう絵本ができてまして。楽しいです。

それから続いて、これは東京都日野市の事例です。東京都日野市は何故、小泉八雲と関係あるかという、実は八雲は『勝五郎の再生』という物語を再話してます。実は有名な話で八雲の前に池田冠山という学者でもあった鳥取の若桜藩主が最初に聞き取りをして文字にしたり、あるいは平田篤胤も『勝五郎再生記聞』っていうのを残してます。八雲はそういう意味では3人目になるんですけども、これは英語で紹介された本なんです。どういうふうな話かと簡単にいうと、「勝五郎が8歳の時に自分のお姉さんに向かって、お姉さん前世は何だったのと聞くわけです。あんたなんてばかなこと聞くのよってお姉さん。僕はしっかり覚えてるよ。僕は6歳のとき疱瘡で死んだんだよ。前世は藤蔵っていう名前だった。お墓に埋められた時も覚えてる。そしたら何か白髪のおじいさんみたいな人に連れて行かれて、しばらく昼でもない、夜でもない、そんなところで過ごして、お前はこれから、今から行くこの家に入って、この家のお母さんのお腹の中に入ってもう一回生まれろって言われた。僕はそうしたんだよ。元育った家に僕帰りたいよ」っていうわけです。結局おばあさんが連れて行くんですけども。ほんとにそうだったっていうこと分かるんです。過去帳だとか、勝五郎は全部覚えてるんです。ここがこういうふうに変わっただとか、あの家なかったとか、前の家は煙草屋だ、今もそうだとか。そういうことで、あたかも単なる不思議な物語っていうか、事実じゃないかっていう人もいるぐらいです。その勝五郎ってほんとにいた人なんですけれども。平田篤胤は自分の弟子にしちゃうんです。勝五郎を。

去年が勝五郎の生誕200年記念で、実は東雅夫さんも講演にいらっしゃったんです。僕もちょっと行きまして、ここでは日野市郷土資料館が中心になって、『ほどくぼ小僧、勝五郎生まれ変わり物語』っていう展示会が行われました。近くに高幡不動という結構有名なお寺があるんです。ここは勝五郎の前世の藤蔵のお墓があって、矢印が付けられてます。実はこれが藤蔵のご子孫の

小宮さんって方なんです。藤蔵自身はもちろん死んじゃって勝五郎に生まれ変わっちゃってますから子孫はいないんですが、その兄弟にご子孫がいて、私も実は親しくさせていただいてまして、小宮さんとこの間お墓参りして、「藤蔵ちゃん、凡さんがお墓参りしてるわよ」って墓石に向かって話かけられて不思議な心境になりましたけれども。不思議な世界と現実の世界の間をずっと日野に行くときまよってる感じです。実は「勝五郎の生まれ変わり物語探求調査団」というのを作られまして、今 60 人の会員がいて全国からこの会に集まってる。このお墓にも小宮さんが自分でパンフレットを作って置いてらっしゃるんですけども。去年 10 月でもうパンフレットの 5,000 部はなくなったっていうのは知ってる人、知らない人含めて訪ねて来られるということだと思います。ちなみにこれが勝五郎の家だった家です。今は多摩ニュータウンですから、こんなふうになってまして、でも、勝五郎の小谷田家の本拠は昔のままこういうふうに残ってるんです。多摩地方ってほんと不思議なところなんです。新しい部分と古い部分が混在しています。この勝五郎の小谷田家から中央大学は土地を買って、中央大学多摩キャンパスを作ったんです。中央大学多摩キャンパスの「勝五郎の道」っていうんです。こういうふうに残ってるわけです。私も半年間中央大学でお世話になってたことがあるんですが、その時知らなかったんです。こっちが勝五郎のお墓なんです。勝五郎の小谷田さんと前世の藤蔵の小宮さん、今もすごく親しくしているんです。「世にも不思議な」と言いますか、そういうことがありまして、まさに日野市では怪談が地域資源になってます。新撰組と勝五郎が日野市の地域資源です。土方歳三と勝五郎は同じ年に亡くなっており、おそらく仲良かったんじゃないかなんて勝手に地域の人は想像されているんです。

さらに八雲によって勝五郎の物語が英語になったことによって実は新しい展開が起こるんです。イアン・スティーブンスンという、私もよく知らなかったんですけども、精神医学の大変権威の先生がバージニア大学の中に来て、バージニア大学っていうのは不思議なことに小泉八雲のコレクションが数万点ぐらいあるという、ものすごい膨大なバレットライブラリーっていうのがあるんです。その中でこの精神医学者は『勝五郎の再生』と出会うんです。大変感銘を受けて、これは精神医学の分野からの前世記憶の研究をしなきゃいけないんじゃないかっていうことで、それがきっかけとなってスティーブンスン博士は世界を旅して、そういった事例を集めて来た。あつという間に 30 例ぐらい集まったんです。そして、「知覚研究室 DOPS」っていうのを立ち上げるわけです。今も DOPS は健在で、すでに 5,000 例ぐらいの生まれ変わりの事例が世界から集められている。中にはイスラム教徒の人の事例も含まれている。もちろんアミニズムとか多神教世界のほうが多いけれども、例えば一神教の世界でもそういった生まれ変わりっていうのが信じられているっていう、そういう文化がある。残ってるんです。そういう中でこれから超高齢化社会を超えて脱社会にいずれなっていく中で、八雲も言ってるんですけども、生まれ変わりの物語というのは輪廻転生という考えは死の恐怖を軽減してくれる。それだけでも大事なことじゃないかっていってますけれども。そういうこともあるんじゃないかというふうに思います。これがバージニア大の図書館ですね。そういうことで、このイアン・スティーブンスン氏によって医学的見地からの前世記憶の研究にこの話がついていってるということ。今は産科医の先生方もそれに関心を持って胎内記憶の研究というのが次第に進みつつあるっていうことです。

そして、最後にちょっと。東京青梅市なんですけれども、日野からそう遠くないところです。ここは『雪女』の伝承地として知られています。八雲の有名な巳之吉と雪が結婚する雪女の話ですけども。これは小泉家に入入りしていた、おそらく青梅から来ていた宗八という庭師さんが伝

えた話だというふうにいわれます。八雲はこう書いてるんです。『雪女という奇談は西多摩郡調布村のある百姓が土地に伝わる伝説として私に語ってくれた話。この話は日本の書物にすでに書かれてあるかどうか知らないが、話の中に出てくるあの異常な信仰はきっと日本の各地にいろいろの変った珍しいかたちで常に存在していたものだろう。』異類婚姻譚なんですけど、異界の異類と人間が結婚するお話ですが、もちろんタブーを犯して破たんするという結末になってます。

実は青梅では何とか八雲の原話をつきとめようと必死になって、ここでも探偵調査団作られたんですが、見つからなかったんです。でも、これはどうもこういうことじゃないかということが最近だんだん分かってきました。つまり八雲がかなりフィクション性が強い話を書いたんじゃないか。近くの檜原村というところがあるんですが、そこには木の精と人間の男性が結婚するお話があるんです。そしてタブーを犯して結婚生活が破たんする。おそらく宗八が伝えた原話はそんなような話だったんじゃないか。八雲はずっと雪女の話が松江で最初聞いてるんです。それは「雪女に出会った」というような話なんですけど、ずっとそれ以来、雪女に関心があって気になっていて。八雲はフィクションで雪女が抱かれたんじゃないかと。じゃあ、「長野県の小谷村なんかにある雪女の話はどう説明するんだ。あれは八雲の話と同じじゃないか。青梅街道通ってその話が伝わったんじゃないの。でも青梅にはないんだよね」っていうことなんです。調べていくと、比較文学の戸田先生という方のお話では、小谷村とか白馬村の雪女の話をつ造した人がいたようなんです。ある新聞記者の方だったようなんですけれども。あんまりにも八雲の雪女の話が好きで、それを再話して小谷村の昔話とかいうのに入れちゃったんです。そうしたらそれを『日本昔通観』とかいう学術書がひろっちゃっていつしか土地の伝承を書いたものになってしまったという。そういうこともあっても不思議じゃないんですよ。一回書かれたものは再び口承文芸に戻って世界に渡っていくという例も決して少なからずあるわけですので、八雲の雪女もそんな話の一つです。

怪談のある場所というのは大体、境界的なところが多いんです。たとえば東京の周縁部です。まず、東京都内で見ると新宿、板橋って怪談多いんです。八雲が住んでたのも新宿です。『耳なし芳一』書いたのも『雪女』を書いたのも新宿です。新宿を一步出ると「異界」ですから。青梅というのがそういう場所では関東平野と関東山地が切れるところなんです。青梅までは関東平野、そこからJRの青梅線ってこんな山岳鉄道に突然変わるわけです。まさにこういう周縁的な町なんです。昭和レトロ商品博物館というのが青梅の中にありまして、ここの横川さんという方が中心になってるんです。雪女をプロデュースしています。多摩川の中で調布橋という橋が残っていますが、そこに雪女ゆかりの地と碑が建っています。そして、レトロ博物館では「雪女祭壇」というのがこのように作られて飾られていまして雪女の部屋というのも作られています。ということで、最近では青梅観光協会の主催で2015年から青梅妖怪ツアーというのを実施してるということです。元々、ここは妖怪の伝承の多いところなんです。青梅でも今うまく資源化しようということで色々努力されているんです。最も最近の話では東さんが関わってらっしゃいますが、杉野希妃さんという大変美しい女優さんでもあり映画監督でもある方がいらっしゃいますが、彼女が『雪女』という映画を作られまして(2017年)3月4日から公開されたんです。これもまたユニークな雪女の描き方をしています。時空を超えて雪女を現代でも出てくるんです。

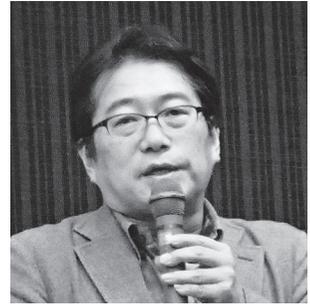
やっぱり不思議文学をこれから地域資源として再評価していくって動きが顕著になってくると思うんですが、大きな関わりの中では社会が後期近代に行き詰るって感じがするのかな。経済一辺倒ではなくて、これからはもうちょっと価値観が多様化したり持続可能な共生

社会とかふるさと創生の動きとか、そういうところに価値観を置くような時代になりつつあると思います。もちろんトランプ政権のようなポピュリズムといわれるような時代も今はきてるんですが、よく民主主義の息抜きだなんていわれたりしますけれども。多分大きな流れとしてはそういったちょっと高度成長期とは違う時代の流れになってきていると思うんです。ガルブレイスという親日家の経済学者が亡くなる前にこんなことを言われています。「これからは GDP ではなくて GNE になっていく時代じゃないか。GDP はもちろんどれだけ物を作ったかということです。GNE は gross national enjoyment でどれだけ人生を喜びで満たすか。そっちに価値観がシフトする時代になるんじゃないか」。そういうことからいけば、作家や文学を地域資源として活かして、さらに文化創造とかツーリズムに、街づくりに活かすということは凄く現代の価値観にも相応しいやり方なんじゃないかなというふうに思ってます。やはり文学というのはこれまで愛読者の鑑賞対象だったり研究者の研究の対象だったと思うんです。もちろんそういった成果も踏まえた上でこれからは一歩踏み込んで各地で「文化資源化」ということが行われていくべきではないのかなというふうに思っております。それでは時間がまいりましたので私のつたない話を終わらせていただきます。どうもご清聴いただきましてありがとうございます。

【基調講演へのコメント：東雅夫】

司会（近藤）：小泉先生、ありがとうございます。話題も広く内容も非常に面白いものだったと思います。これを踏まえまして次の第2部には「具体的にどういうふうに地域資源として民間伝承や怪談を活用していくのか」ということを議論したいと思いますが、その前に議論の呼び水と致しまして東雅夫さんに若干のコメントをいただいてその上で休憩にしたいと思います。東さん、よろしくお願い致します。

東：東雅夫と申します。よろしくお願い致します。私は「ふるさと怪談トークライブ」というものを震災の後ずっとやってるんですが、その具体的な取り組みについては第2部のほうでお話をしたいと思います。今は凡さんの大変素晴らしいご講演についてコメントというかたちでお話をしたいと思います。これは今日に限らず凡さんのお話を伺っていると私いつも実感するんですが、小泉八雲というのは明治の中期、亡くなったのは1904年ですから、日本が文明開化の後、ようやく近代社会というものが形成されていく、そういう最中に日本にやってきて、そして色々なかたちで古い日本の良さというものを実感したという。それを文学というかたちで書いて、逆にそれが我々日本人にとって大変貴重な遺産として受け止めていくようなものとなったということですね。



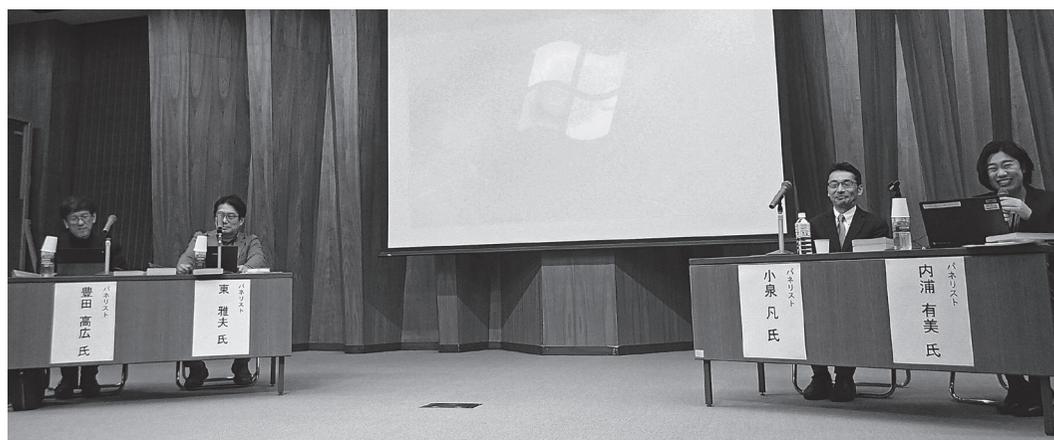
当然、生きている時の八雲というものは、今なら動画があるわけですが、そういうものはありませんから残っておりません。でも凡さんのお話を聞いていると何だか八雲が目の前で我々に語りかけているような、時々錯覚にとらわれる。凡さんご自身の、特に横顔の感じなんてほんとに八雲の写真とそっくりなんです。さっきちょっと伺った八雲記念館がリニューアルされて、その映像に凡さんが特別出演をされていて、シルエットですけれども、ひいお爺様の代わりに凡さんがそこで出てらっしゃると聞いて「なるほど」と思ったんです。

同時に八雲というのは非常に人を惹きつける魅力のある語りができた方らしいです。当時、東大で教鞭をとっていたのですが、文学を教えていた時にも学生たちに愛された先生だったらしいです。色々な弟子たちが、師である八雲を皆慕っていた。そういう人を惹きつける魅力をもっていた八雲の在りし日の姿というものが直系のご子孫である凡さんのお父様、おじい様で八雲がいるという、まさに4代。凡さんには『怪談四代記』って非常に素敵な本がございますけれども。その怪談四代の血の流れというものが今まさにこの場で我々に八雲自身が語りかけているような感じを受ける。だから、それを今の我々が、八雲が描き憧れていたそういう怪談や民話の世界とこの場でつながるような感覚にとらわれる。そんな気がいつも私はしまして。それは同時に八雲自身の今回のお話の前半で大変詳しくご紹介いただいたようにトラベラーとしてワンダラーとして世界をぐるっと回って日本までたどり着くという、そういう八雲自身の一の貴種流離譚といえますか。高貴な生まれの人が不遇なかたちで流浪をしていくという、そういうお話、民話の一つのパターンとしてありますけれども、貴種流離譚的な民話伝承の中の登場人物のような、そういう一面が八雲の生涯には非常に色濃くあります。八雲自身が民話の中の人物でもあるかのような、そんな感じを今日のお話の中から実感して、それがさらに巡り巡って凡さんを通じて我々がここで実感することができるという。なかなかこういうことはないです。

文学者、色んな文豪の人がいますけれども、その直系のご子孫の方が民俗学をご専攻されているという。これもちょっと余談になりますが、八雲というのは日本の民俗学の言ってみれば先覚者なわけです。八雲の『怪談』は1904年に書かれております。それがその年に八雲は亡くなりますから遺著のようなかたちになったものですが、さっきお話の中に『遠野物語』という日本の民俗学を確立した柳田國男という学者さんが出てきました。この柳田の民俗学の始まりになったのが『遠野物語』なんです、それが書かれるのは1910年です。ですから八雲の『怪談』と柳田の『遠野物語』、遠野物語も言ってみれば八雲が開拓した再話文学の一種なんです。佐々木喜善という遠野の方が語った怪談、奇談を柳田先生が手帳に書き留めて、それを柳田さんの言葉で再話をしたものです。ですから非常にこの二つの本は共通しているんです。ということは、柳田の『遠野物語』のすぐ前に八雲の『怪談』があった。柳田國男はそういう日本の怪談話を探求することによって民俗学という学問を確立していった。だからちょっと踏み込んだ言い方をすると日本の民俗学の源流にも怪談が実はあるということなんです。そのまさに先覚者となったのが八雲であるという。そういうことも今日のお話から私は感じました。

同時に、また後でちょっとお話を致しますけれども、私、『幽』という怪談専門雑誌を十数年やってるんですけども。その創刊号と10周年の号で小泉八雲の特集を致しております。これは今の我々が怪談というものを文学的にも民俗学的にも探求をする時にまず先駆者として最初に注目すべき作家は八雲なんじゃないかと。今日のお話の後半でありましたが、怪談の中には真理があるという八雲の確信、信念。まさにそこが我々が怪談雑誌をやっていく上でも基本になるポリシーだと思って、ずっと怪談について扱ってきました。ですから八雲というのは色々な意味で日本人にとっての怪談の源流であると。そういうことを改めて感じた次第です。

**【パネルディスカッション：怪談・民話を地域資源として受け継ぐ
—小泉八雲・ふるさと怪談に学ぶ—】**



【冒頭あいさつ】

司会（内浦有美）：それでは皆様、お時間が参りましたので第2部のパネルディスカッションを始めたいと思います。パネルディスカッションの司会進行させていただきます内浦と申します。どうぞよろしくお願い致します。

皆さん、第1部の小泉凡さんのご講演いかがでしたでしょうか？ すごく楽しくて、まるで自分も凡さんのご講演のなかの八雲と一緒に世界中を旅して一周してまた日本の豊橋の地に戻ってきたなという感覚になった方も多かったんじゃないかなと思います。

本パネルディスカッションのパネリストのみなさんをご紹介します。まず、第1部の基調講演でご講演いただきました小泉凡さんには引き続きパネリストとしてご参加いただきます。そしてそのお隣、第1部でご講演にコメントをいただきました東雅夫さんです。そして最後に、田原市中央図書館の館長をされていらっしゃいます豊田高広さんです。本来でしたら皆さまの肩書をここでご紹介させていただくんですけども、お配りの資料の裏面にご登壇者のプロフィールが書いてありますので、ぜひこちらを片手にご覧いただきながら皆さんのお話をお聞きいただければと思います。コーディネーターは私内浦が担当させていただきます。第2部はこの4名でお送りしていきたいと思っています。今回のテーマであります『怪談・民話を地域資源として受け継ぐ』、このテーマの核心に迫るようなお話を90分間ノンストップでしていきたいと思っていますので、どうぞ皆さんよろしくお願い致します。

それでは早速ですが、まずはじめに、豊田さんから田原市中央図書館の『ふしぎ文学半島プロジェクト』のお取り組みの事例を紹介いただきたいと思います。

【『ふしぎ文学半島プロジェクト』事例紹介：豊田高広】

豊田：皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきました田原市中央図書館の豊田と申します。はじめに田原市図書館の中にあります『泉名月（いずみなつき）記念ふしぎ図書館』のご紹介をしたいと思っています。みなさんのお手元にある緑の封筒の中に1枚もの案内が入ってるんですけど

も、今日は私は『泉名月記念ふしぎ図書館』館長としてこちらに伺いました。どうぞよろしくお願いを致します。

資料のプロフィール欄のところにも書いてありますように、私は元々田原の出身ではなくて、八雲ゆかりの焼津の隣の静岡市の出身でございます。縁があってこちらに来ています。ちなみに私の前任で田原の図書館を立ち上げた前館長は日野の出身ということです。日野の図書館に勤めていたんです。ということで、そこにもふしぎな縁を感じてしまいます。では、時間も限られておりますので、『ふしぎ文学半島プロジェクト』の話をさせていただきたいと思います。

最初にざっと概要をお話させていただきたいと思うんですが、実は2014年に『泉名月記念ふしぎ図書館』では『お散歩 e 本-ふしぎ編-』という電子書籍を発行しました。田原、渥美半島のふしぎを発信する電子書籍です。その中に『ふしぎ文学半島プロジェクト=ふしぎ発信基地としての図書館』という一文を書かせていただいております。最初に少しそちらの紹介、誕生の経緯や東さん、小泉さんとのご縁についてお話をさせていただこうと思います。

ご存知の方はご存知だと思うんですけども、幕末の先覚者である渡辺崋山は田原の人なんです。現在の愛知県田原市内にあった田原藩の家老でした。1839年、今から200年近く前に幕府の弾圧を受けて職を解かれてしまった渡辺崋山が晩年を過ごした場所が、田原城下にある池ノ原という場所なんです。今はきれいな公園（池ノ原公園）があります。その池ノ原で1934年に泉名月という人が生まれました。この名月は、『高野聖』『天守物語』などの幻想的な作品で知られている文豪、泉鏡花の姪だったのですが、鏡花の没後に望まれてすず夫人の養女となったんです。童話とか鏡花にまつわる随筆を綴る一方で、原稿や遺品を守ってご自身が2008年に亡くなるまで泉鏡花記念館の名誉館長など鏡花文学の普及に尽くされたんです。そして2012年、ご遺族から田原市へ泉名月の遺品の一部を寄贈していただき、図書館で活用することになりました。それがその翌2013年11月に田原市の中央図書館の2階にオープンした『泉名月記念ふしぎ図書館』というわけです。『泉名月記念ふしぎ図書館』は泉名月さんの業績を顕彰すると同時に、泉鏡花や彼と親しかった偉大な民俗学者である柳田國男にちなんで幻想文学の魅力を多くの人に知っていただくためのコレクションになっています。何故、柳田國男の名前が出てくるかというと、柳田國男は若い頃、まだ松岡國男と名乗っていた頃ですけども、現在は田原市の一部となった伊良湖に滞在していて、南の島から海岸に流れ着いた椰子の実を拾った『椰子の実』のエピソードが有名で、田原ともゆかりがあるんです。このエピソードが柳田の代表作の一つである『海上の道』や、島崎藤村の『椰子の実の歌』に繋がっていくという因縁があります。

田原市図書館では2011年と2012年の夏に『椰子の実ふしぎ塾』という名前のワークショップを開校しました。ここで中学生や高校生に“田原の地名が必ず入っている”という条件で地名しぼりの怪談を書いてもらうというワークショップをやりまして、2冊の冊子にまとめました。これが『泉名月記念ふしぎ図書館』の前段の話なんです。この『泉名月記念ふしぎ図書館』の開設にあたっては、翻訳者の金原瑞人さん、今お隣に座ってらっしゃる東雅夫さんのお二人、幻想文学・ふしぎ文学に深い造詣をお持ちの目利きのお二方に「この本まず読むといいよ」という200タイトルの幻想文学を推薦していただきました。加えて、泉鏡花研究の第一人者である田中励儀先生にも、泉鏡花とその世界への入門にふさわしい76タイトルの本をリストアップしていただきました。これらの本と、先に泉名月さんのご遺族に寄付していただいたものと一緒に、『泉名月記念ふしぎ図書館』を構成する基になるコレクションにしたわけです。現在でも毎年、東さんと金原さん、そしてその年々で違うんですけどもゲストの方に本の推薦をしていただい

て、それを中心に収集をして、『泉名月記念ふしぎ図書館』は成長を続けております。

『泉名月記念ふしぎ図書館』の開設をきっかけにしまして、田原市図書館では幻想文学の楽しみと渥美半島での色んなふしぎを知ってもらい取り組みをしています。渥美半島はある意味で昔は辺境の地、「奥郡」なんて呼ばれた時代もあるんですけども、そういう渥美半島の魅力を発信するために『ふしぎ半島プロジェクト』というものを始めたわけです。2012年から2013年にかけて金原氏、東氏をはじめとした多才なゲストをお招きしてイベントも実施しております。…と紹介文には書いてありますが、実は今も毎年やっております、2016年も実施を致しました。2017年も実施をする予定です。これからも田原市図書館はふしぎを愛してやまない方々のためにふしぎ発信基地としての役割を果たしてまいります。

そもそも私が静岡から田原に移ってきたのが2010年で、それは田原市の図書館で働くために来たわけなんですけれども、この2010年の5月か6月だったと思うんですけども、この『ふしぎ文学半島プロジェクト』を始めるきっかけとなる事件が起きたんです。どういう事件かというと、大した事件じゃないんですが、図書館の中に空を飛ぶコウモリが迷い込んだんです。前日の夜、私が当番だったんですけど、うっかり窓を閉め忘れたのでコウモリが入ってきちゃったと思います。それが館内をパタパタ飛び回るといって非常にシュールな光景を見まして、ふと閃いたのが「コウモリといえたいていが吸血鬼の眷属、図書館の中で色々とふしぎなものが動き回っているようなイベントをやってみたらいいんじゃないだろうか」。ということで、2010年の8月に最初に行ったイベントが『一夜限りの怪談図書館』でした。図書館の中で怪談の朗読と図書館全体をお化け屋敷にして肝試しをやるという、そういうイベントでした。その時、朗読に使ったものはすでに書かれた文学作品で、これは中学生・高校生向けにやったんですけど、「せっかくやるんだったら、やっぱり地元になんか読むたいよね」となったんです。

そういう事情・理由で、翌2011年に先ほどお話をした『椰子の実ふしぎ塾・ティーンズ怪談学校』を実施しました。中学生・高校生に実際に怪談を作ってもらいワークショップを行ったわけです。ここで色々と田原にちなんだ怪談ができましたので、それを後に『お散歩e本-ふしぎ編-』という電子書籍に載せることにしました。そのような経緯があり2011年の7月に『ティーンズ怪談学校』を実施したんですが、実施した日が7月31日でした。当日に田原市図書館に宛てて一通のメールが届いたんです。そのメールを書いた方はちょっと分からなかったんですが、そのメールには「おめでとございます。今日は柳田國男の誕生日ですよ」って書いてあったんです。全然そんなことこちらとしては意識してなかったんですけども、その時初めて『柳田國男』が脳裏に浮かんだんです。実はその5日前の7月26日、泉名月さんのご遺族が田原市の図書館に来館されて、「名月、鏡花の遺品を図書館に寄贈したい」というようなお申し出をしてくださりました。それまでは全く私は泉名月さんのことも知らなかったし、私の周辺の人も誰も泉鏡花と田原のご縁を知らなかったんですけども。まさにこの数日の間に泉鏡花、そして柳田國男というラインがまとまって、そこから『ふしぎ文学半島プロジェクト』へと進んでいったわけです。

この『ふしぎ文学半島プロジェクト』の企画書を書いたのが2011年の10月でしたが、改めてそれを読み返してみると、二つの大きな目的がありました。一つは「図書館に泉鏡花と柳田國男という田原にふしぎなご縁のある二人の作品や、あるいは遺品をコアにした幻想文学のコーナーを作りたい」というものでした。ご存知の方も多いと思いますが、田原の隣の豊橋市には凄く立派な図書館があるわけです。その豊橋市の中央図書館は100年以上の歴史があって、蔵書の蓄積という点ではとても田原はかなわないというふうに思っていました。「何か田原独自のものを

100年のスパンで、100年単位で築いていけないだろうか」というふうに考えた時に、『幻想文学、ふしぎ文学だ』と思ったんです。これが一つの理由なんです。もう一つの理由は、私が田原に住み始めて1年ちょっとだったんですけども、「非常にふしぎな魅力に満ちた半島だな」ということが色々な時に感じるが多かったんです。別にコウモリの話だけではなくて。そのふしぎな魅力に満ちた渥美半島という半島のブランディングっていうんでしょうか、それに図書館として貢献できるんじゃないんだろうかというようなことも考えたんです。その時に脳裏に浮かんだのが「ふしぎ文学のまちのネットワークみたいなものが作れないだろうか」ということだったんです。

最初に浮かんだのは、泉鏡花が生まれた町でもある「金沢」でした。例えば金沢に対して能登半島があるように、豊橋に対する渥美半島ってどうか色々なことを考えたんです。田原の色々な物語という地域資源を『ふしぎ文学半島』というコンセプトで編集して提示して、田原市の外の人や中の人々が色んなかたちで交流していく、あるいは共感をよんでいく。そういうようなことが出来ないだろうかというのが『ふしぎ文学半島プロジェクト』の始まりだったんです。

先ほど2013年までの話をしたんですけども、2014年以降はお化け屋敷からさらに色々やっけていくことが変わっていきまして、2015年には今日司会をしてくださっている内浦有美さん原作の『豊橋妖怪百物語』をお芝居にして、そこに田原の物語を付け加えて豊橋市の桜丘高校の演劇部に図書館を使って芝居をしていただきました。そして2016年には小泉凡さんと東さんと内浦さん、そして最初に琵琶で演奏していただいた村田青水さんにもお越しいただいて、小泉八雲の怪談の『耳なし芳一』を芝居に仕立てて田原市内にある成章高校の演劇部に、これもまた田原の図書館を舞台にして演じていただきました。これからもまだ延々とおそらく100年単位でこの『ふしぎ文学半島プロジェクト』は続いていくと思うんですけど、まずその第一段階の始めぐらゐの状況で、皆様にごいったお話を報告できることを大変光栄に思っております。ひとまずここまで私の話を終わらせていただきます。ありがとうございます。

内浦：どうもありがとうございます。皆さん、豊田館長のご発表の冒頭に映像が乱れて失礼しました。東さんや小泉凡さんもよくご経験されていると思うんですけど、そして私もなんですけど、怪談とか妖怪のイベントでは、結構、電気系統のトラブルがあるんですよね。ほんとによくある。この会場は何と事務局の人たちが念には念を込めて、多分たくさんの方が来てくれるからと、前日からそして今日も朝早い時間からこの会場で万全の態勢で準備したんです。映像完璧、何回も色んな人が見ている。ちなみに、私は以前にパソコン教室の先生もしていたぐらいなのですが、今日こうして映像の一部がとんでしまうという…凄いです。(背後を指差しながら)この辺に色んな人たちがいるんだと思います。フワフワ、いたずらしてやれって。それでは館長、今つきましたので簡単に映像のご紹介いただいてもよろしいでしょうか。

豊田：はい。こちらが『泉名月記念ふしぎ図書館』の映像です。『泉名月記念ふしぎ図書館』は田原市の中央図書館の2階にございます。入っただけではちょっと分からないのですが、最近「怪談」とドーンと貼ってあるので分かりやすくなりました。消火栓がちょっと邪魔なような気もするんですけども、これはこれで何となく「ぬりかべ」っぽい雰囲気かなと思わないでもないです。

内浦：(怪談専門誌『幽』を手にして会場に見せながら) こちらは東さんが編集顧問を務められています『幽』です。これは私の個人所有の『幽』なんですけど、(壇上に並べてある『幽』バックナンバー数冊を指差しながら) あっちにもある『幽』は全部、田原図書館さんから今日お借り

してきたものです。

豊田：雑誌の『幽』は全巻そろってます。東さんのご著書である『遠野物語と怪談の時代』も同様に、本日田原図書館から借りて来ました。明後日ぐらいにすぐ返しますので良かったら皆さん、田原図書館で借りて見て下さい。次の画像へいきます。

豊田：私はイベントやる時には必ず近くの神社に朝お参りに行って、終わってから必ずお礼をするということを欠かしていません。そうしないと本当に何があるか分からないと思っていますので、自分は結構合理的な人間だと思ってるんですが、それだけはやっています。

内浦：すみません。(会場スクリーン投影用に)デスクトップに保存したパネリスト各位のデータが全部とんでます。ファイルが全部ない。皆さん見えます？さっきまでそこにあったフォルダが全部消えてる…

豊田：すみません。今日はお参り忘れちゃったんです。

内浦：そういうことですね。

東：私も年に嫌というほど怪談系統イベントを色んなかたちでやるんですけども、本当多いんですよ。トラブルが多いのは我々分かっているんで入念にチェックしてるんだけど、いざ本番になるととぶっていう。面白いです。

内浦：特に電気系統のトラブルが多いです。

東：皆様ほんとうにご不便をかけて申し訳ございませんが。

内浦：今日ほんとに色んな所から遠方からみえて下さる方もいらして、気軽に田原図書館に行ってくださいねと言えないけれども、でもとっても素敵な図書館なので近くの方も遠方の方も一度実際に行ってふしぎのコーナーを目にして、「この蔵書凄い」というのを体感していただけたらと思います。

豊田：ちなみに場所は愛知大学豊橋校舎のすぐ近くを通っている渥美線の「三河田原駅」(終点)から歩いて15分ぐらいです。意外と近いので気軽にお立ち寄りいただけるかと思います。

東：蔵書もそうなんですけど、とにかく図書館の建物自体もほんと素晴らしい。私最初に行った時にボルヘスの『バベルの図書館』を何となく連想したぐらい素敵な所です。そこにこういうふしぎ文学、怪談、幻想文学の非常に濃い書庫ができてるといえるのは、全国的にもないことだろうなど。ないですよ？

豊田：ないと思いますし、「幻想文学、プラス、民俗」というやり方も全然聞いたことがないですね。

東：そうですね。行ってみる、一見の価値がある図書館と思うんです。

内浦：東さんが「ない」って言われるのだったら、全国にほとんどないでしょうね。ありがとうございます。(スクリーンに投影した写真を指差しながら)こちらが去年の『ふしぎ文学半島プロジェクト』の様子ですかね。これが館長室前ですよ。

豊田：そうですね。八雲の関連の写真とか年表が貼ってあります。

内浦：これがさっき見ていただいた『泉名月記念ふしぎ図書館』のコーナーの蔵書ですね。

豊田：はい。『水木しげる全集』もこの時出たかな。

内浦：ここの黒い所、水木さんと怪談。ちょっと見えづらいかな。

豊田：ちょっと特集で出してみました。これが『耳なし芳一』の芝居をやった時で。

内浦：成章高校の演劇部のみなさんとコラボされた？

豊田：はい。ホールではなくて本当に書架が並んでいる中でやったんです。後ろが中庭になっていまして、嵐の場面では中庭の2階から雨を降らすということもやったんです。私も実は鎧を着

て平家の亡霊の役をやっております。

内浦：芳一の耳を取る。取る側の人間？

豊田：はい、そうです。ちょっと残酷なシーンなので隠してあります。

内浦：これが4ヶ月前、昨年（2016年）の11月に行われた『ふしぎ文学半島プロジェクト』の東さん、凡さんの対談のときの様子ですね。

豊田：そうです。この時には基本的には東さんと小泉さんの対談というようなかたちで、内浦さんもちょっと加わっていただいていたという感じでした。

内浦：ちなみに会場のみなさんのなかで、この11月に開催された田原図書館の会に参加したよという方、お手を挙げていただいてもいいですか。結構お見えになっておられますね。ありがとうございます。あの時盛り上がったんですよね。盛り上がって盛り上がって、終わりがきた時に「これはもうまとまらない、というか、これで終わるのはおしい」となって。「今回もう一回この続きをどうしてもやりたい」ということでお話をしたところ、総合郷土研究所の所長はじめ事務局の皆さんもご快諾下さり、さらに深掘りをした「文学的かつまちづくり的な視点」からのシンポジウムを開催することができました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

それでは今、豊田館長に田原図書館の『ふしぎ文学半島プロジェクト』の取り組みをご紹介いただいたんですけども、このお取り組みについて、スタート時からずっとパートナーで一緒にいらっしゃる東さんから所感というかご質問など、何でも結構です、よろしく願います。

東：今も言ったように本当に全国にたくさんの図書館がありますけれども、こういう明確なポリシーを持って、しかもおぼけ好きなポリシー、そもそもこの企画自体が館長のおぼけ好きが全開したようなかたちで企画が始まっているところからして、我々にとってはとってもすばらしい試みです。もう一つは、それを先ほど館長が「100年の計」とおっしゃいましたけれども、腰を据えて継続して取り組んでいかれるという、その姿勢が私はすばらしいと思います。こういうものって1回だけやってそれでおしまいっていうのは悲しいものがあります。同時に企画が積み重なっていくことによって、後ほどちょっとお話しします『ふるさと怪談』もそうなんですけれども、何年も積み重なっていくことによって色んな人が集まり交流が生まれ、そこから秀でた文化も生まれてくるという。だから腰を据えて取り組んでいこうという姿勢が大切です。しかもその発想が柔軟なんです。豊田館長は図書館を使ってお芝居をやってしまうとか、雨を降らせてしまうとか、ほんとにやりたい放題な感じで、普段はわりとポーカークフェイスなんですけど。そういうことを考えておやりになってしまうというのが、私も色んな所を回っておりますけれども、これだけ柔軟に、しかも力強く進めて取り組んでらっしゃるところっていうのは、私は他に知りません。

内浦：今、「柔軟」っていうお言葉がキーワードであがったんですけど、ご本人からするといかがでしょうか？

豊田：はい。柔軟といいますか、私が一人でやってるわけじゃなくて、むしろ強力なスタッフがたくさんいて「あれをやれ」、「これをやれ」ということで突き上げを受けると私が断りきれない。皆の期待に応えたいと思っちゃう人間なんで、結果としてそんなことになってるということだと思います。ちなみに今日も担当スタッフや元担当スタッフが三人ほど来てるんです。ちょっとスタンドアップしていただけますか？ 三人とも今日は業務ではなくて自ら望んで来ているという。

こういうスタッフがいるからこそできるというところがあると思います。

東：それ大事ですよ。私もそうなんですけど、上に立つ人間ってわりと、私はどっちかというとずばらなほうがいいと思っていて、それこそ支えてくれる方たちがしっかり実務面とか、ちゃんとテキパキとやる方がいたり目を光らせるおっかない方がいたり、そういうチームワークでないと続かないだろうなと思います。

内浦：怪談とか妖怪とか民話で自治体とか公共施設と何かをしようっていう時に、行政側のトップが豊田館長のようなユーモアがある方ばかりじゃなくて、意志疎通がなかなか難しいシーンっていうのは結構業界ではあると思うんですけども、その辺りはどうでしょう？ 館長は決済権も持ってるし一方で企画もするし、けれど板挟みになることもあるという……。行政側の人間としてもいかがでしょうか。

豊田：はい。一つは、やるからには自分たちにとって意義もあるし面白いしっていうことをやりたい。少なくとも自分たちにさえ面白いと思えないものが大勢の人にとって面白いと思えるはずもないだろうっていうのはあるんです。ですからできるだけ図書館を使って下さる方とか、あるいは元々興味がなかった方に興味を持っていただいて、できれば図書館のファン、そして田原のファンになっていただきたいと。そのための事業だというふうに考えていますので、税金から給料いただいている分ぐらいはちゃんと何とかお返しできてるのかな、この事業で、というふうに思っております。

内浦：来館者の方や市民の方からの反応はいかがですか？

豊田：そうですね。まだまだ「凄く広がってるよ」っていうふうに言うことはできないと思う。そういう意味では100年の計の5年分ぐらいしかまだきてないというふうには思ってるんですけども。来て下さる方はアンケートなんかでも非常に熱いコメントを下さっていますし、徐々に図書館の2階のある意味、目立たない場所にあるコーナー、ふしぎ図書館にも訪れて常時利用して下さる方は増えているという点も感じております。

内浦：ありがとうございます。それでは凡さんにもお伺いしたいなと思います。(2016年の)11月にご参加されて田原図書館の取り組みやイベントいかがでしたか？

小泉：はい。今も東さんがおっしゃいましたけれども、図書館の建物もすばらしいし、ふしぎ文学をあれだけ集めたっていう蔵書についてもすばらしいですけども、やっぱり何より人間のソフト面というか、スタッフ、館長さんはじめプロデューサーみたいな方もいらっしゃるし、ちゃんと演者になれる人もおられるし。これからのまさに司書さんのあり方だということを、未来へ向かった司書さんの姿っていうのを見せていただいたような気がします。図書館っていうのはこれからまちづくりの中心になっていく施設じゃないかなというふうに思う。ただ残念ながら、現在それができているところは極めて少ないじゃないかなと。ちょっと古い話で恐縮ですけど、小泉八雲がニューオリンズに住んでる時に初めてニューオリンズ市に公立図書館ができたんです。ティルトン記念図書館っていう図書館。それを八雲がジャーナリストとして取材に行ってるんですけど、やっぱり公立図書館ができるっていうことは、その町にとって財産なんです。八雲の言葉で言えば立派なホテルができたのと同じぐらい、あるいはそれ以上に知的好奇心を満たしてくれるものだっていうことを大いに喜んでるんですけど、まさにそういう意味ですばらしい図書館だと思います。

豊田：ありがとうございます。今、連想したんですけども、田原の町ってトヨタなんかの大きい工場があって、そこで働く期間工の方々っていうのがいらっしゃるんです。ある意味、漂泊する

人たちってというような言い方もできると思うんですけども。図書館を凄くファンになって下さる方の中にそういう方々が非常に多いんです。もちろんパチンコ屋さんもたくさんあるんで、そこへ行って稼いだお金を全部使っちゃうこともできるわけですけども、図書館へ来て色々なものを読んでくださる。そして、おそらくそれを通じて、そう数多くないかも知れないけれども地域にまつわる色々な物語を知り、その地域に対して愛着を持ち、しばらくここで根を下ろしてみようかっていうふうに思う方もいらっしゃるんじゃないかなと思うんです。図書館ってというのは間違いなくそういう役割を果たすものだし、多分それはニューオリンズの図書館も田原の図書館も変わらないのではないのかなって思うんです。

内浦: ありがとうございます。どんどん館長のお話を聞きたくなってしまいますね。でも、ひとまず田原図書館の事例のお話はここまでにして、シンポジウムの後半戦で、色々なお話が飛び交いますので先に色々な事例をご紹介いただきたいなと思います。凄くたくさんの方の映像、画像を今日のために東さんがご準備してくださっています。

【『豊橋妖怪百物語』 事例紹介：内浦有美】

内浦: それではお話が前後しますが、二つ目の事例として、私も携わっています豊橋、田原の怪談、妖怪、民話のお話をさせていただきたいと思います。皆さんのお手元に水色のチラシを同封させていただきました。この中に茶色いマップがございます。本来は『豊橋妖怪百物語』の書籍の中に付録として入れさせてもらってるものなんですけれども、今日は特別にご来場いただいた、「ありがとう」という意味を込めて入れさせてもらいました。こちらは『豊橋妖怪百物語』で掲載した百の話が載っています。なんですけれども、新しい動きとしまして、先ほども立っていただいた田原図書館の職員の方もご協力いただき、さらには今日ご来場いただいている豊橋の語り部さんたち、大原さんも小柳津さんもスタンドアップしてもらってもいいですか？ この方々にご協力いただきまして田原と豊橋の民話、怪談の話も含みます、これを300話集めまして、現在、地図と出典の一覧、どの書籍にどの話が載っているかなというのをざっと調べ上げました。正直に言うところの仕事を猛スピードでやったのはこの1、2年なんですけれども。足掛けますと5年近くの活動の総大成になります。今はこの『マップ百話』なんですけれども、最終的には300話これが集まった。もちろん300話の情報はこんなちっちゃい地図じゃ全然入らないので、これの8倍ぐらいの紙にマップにして表面は地図で裏面はどの本に載っているかという出典一覧を集め、2017年6月に出版、本屋さんで地図なんですけれども販売予定です。同時に豊橋の小中高校に全てに寄贈し、田原の学校にも寄贈させていただくという活動もしています。多分とっても内容が細かいので見にくいと思うんですけど。2017年6月に出来上がるので現在はラフデザインしかできてないんですけども、(スクリーンの映像を指差しながら)今のが進行している『豊橋・田原の民話・怪談300話』です。

では、私の宣伝はこの程度にして、大変お待たせ致しました。ここから改めまして東さんの『ふるさと怪談』を中心にした事例をご紹介させていただきたいと思います。どうぞよろしく願い致します。

【『ふるさと怪談』事例紹介：東雅夫】

東：シンポジウムの前半でお話をしましたが、これが『幽』という私が編集している怪談専門雑誌であります。右側が2004年の創刊号です。特集が『小泉八雲』ということになっております。左側のほうがちょうど10周年の時に特集をした『ハーン、八雲 Retold』の号です。まさに再話ですけどもハーン、八雲 Retold という特集を組んだというものでございます。先ほども申し上げましたように、ハーンのいう「怪談こそ真理」、そして文学も言ってみれば神髄は怪談であるという。これは八雲じゃなくて佐藤春夫という大正時代に大変活躍した文豪がおりまして、その方が言った言葉だと伝わっておりますけれども、もう含む意図はほんとに同じです。八雲と佐藤春夫。実は春夫と八雲は関係がありまして、さっきお名前が出た平井呈一さんという八雲の翻訳をなさった方のお師匠さんにあたる方なんですけれども、色んな因縁があるんです。実はさっき豊田館長から『ふしぎ文学半島プロジェクト』のお話をいただいた時に「あっ」と思ったんです。現在、各地で地域に根差したおばけ、妖怪、怪談のイベントやムーブメントというものが色んなかたちで起こっています。これは隅田川の流域の小学校、中学校で妖怪に造詣の深い天野行雄さんという方がそれぞれの土地に根差した怪談をやっているという。それをまとめた本が『隅田川の妖怪教室』で、さらにここでは大きな化け鯉の作り物を中学生たちが一所懸命、自分たちで作って、それを練り歩くという、そんなことをやったりしています。これはご存知、愛知の『愛知妖怪事典』。これが出たのは去年（2016年）でしたっけ？

内浦：去年です。

東：こういうふうに変な充実した愛知の妖怪の事典が作られる。地域別のこうした妖怪探究、妖怪研究というものも今、特にこの愛知県、盛り上がっております。今度はこれは尼崎で『尼崎百物語』というものです。これはやはり現地の大学が中心になって、その大学と市民の皆さんと連携で連続講座をしたり、これも先ほど紹介された内浦さんがおやりになったのと極めて近い発想で尼崎にまつわる怪談、奇談を大学の学生さんたち中心に収集して百物語という、百話の怪談として作られたものなんです。次は凡さんも関わっていらっしゃいます松江の『松江怪談』という新作怪談です。八雲の流れを受け継ぐような怪談を公募なさいまして、その受賞作品です。この中には色々な八雲の作品も含まれておりますし、山田太一さんとか出久根さんとかそういう著名な作家の方々も寄稿していたり、あるいは講演、語りをされているという本でございます。ここまでが現在、色々なところで行われている、怪談、妖怪と地域の色々な文化信仰というものを絡めて企画等を進めていくという例です。ここからは私自身の個人的な色々な活動なんです、『てのひら怪談』っていうのですが、オンライン書店でピーケーワンっていうのが昔あったんです。今は残念ながら某アマゾンという巨大ネットストアに完全にやられてしまっていてなくなっちゃって、フォントというサイトに吸収して消えてしまっております。そのピーケーワンで私が怪談とか幻想文学の社会エディターという色々な推奨本をサイトで紹介するという仕事をしていた時に夏のイベントとして800字で怪談をユーザーの皆さんに書いていただいて、それをメールで応募していただき、ピーケーワンの特設したサイトにリアルタイムで応募作品を掲載していくという企画をした。つまり、応募した作品が全部人目に触れるという、そういう試みだったんです。全部、怪談です。

その怪談を私と怪談の作品で有名な加門七海さん、福澤徹三さんという三人の選者がそこから優秀作品を選ぶ。そういうことをやまして、『てのひら怪談』という名前を付けたんです。ピー

ケーワンは2000年に立ち上げて、この『てのひら怪談』の公募とかをずっとやっていったのは2005、6年ぐらいの頃からなんです。これが一つ前哨戦としてございました。お示したのはそれが文庫になったやつです。これはビーケーワンの公募作品の中から優秀作品を毎年まとめて一冊の傑作集として出すという、そういう本シリーズを全部で6、7冊、毎年出しました。さらに『文豪てのひら怪談』という個々の作家が書いた800字以内の作品を集めたアンソロジーを編んだりと。

そこから本題なんですが、『てのひら怪談』の次に今度は『みちのく怪談』という、同じく四文字ひらがなに「怪談」がついた名の、そういうムーブメントを始めました。これは何かと言いますと、まさにさっきの豊田館長のお話にあった柳田國男の『遠野物語』が書かれたのが1910年で、丁度2010年で100年目なんです。お示した資料はちょっと見えにくいと思うんですが、「遠野物語100周年」ということで東北の色々な出版社が柳田関係、こういう怪談関係で遠野物語にちなんで色々な作品を本にして出したりするという、そういうことが行われました。これは仙台にある荒蝦夷という出版社です。ちなみに今年(2017年)の3月10日から11日にかけて「ラジオ深夜便」というNHKのラジオ番組で荒蝦夷のみちのくの怪談の本を朗読し、そして荒蝦夷の土方さんという編集長、代表の方がそこへ出てお話をされるということをやりました。こういう怪談の本を出した荒蝦夷の土方さん、豊田館長と同じで昔からそういうおぼけ好きなんです。「何かチャンスがあったらこういうものを自分のところで出したい」と。大変小さい出版社です。荒蝦夷というのは社員さんが三人ぐらいで営業から何から全部やっているという、そういうところなんですけれども、丁度その「遠野物語100年」でそういう企画をやりたいという話で私のところにご相談をいただきました。画面の右側が『彩雨亭鬼談』という、これは杉村顕道さんという仙台のマイナーな怪談作家なんです。その方の作品を全集として一冊にまとめて出すという、そうした怪談が好きの人にとっては画期的な企画なんですけど普通は実現しないような、そんなものをどんどん出していこうということになったんで、私も『みちのく怪談名作選』という明治、大正、昭和の東北と関わりのある優れた作品を集めたアンソロジーを作ったりして。

それで、せっかくそうした一連の動きをするんだから何かキャッチフレーズがあるといいよねと、「ふしぎ文学半島」みたいな。それで「みちのく怪談という言葉を打ち出したらどうでしょうか」ということを提案しまして、この『みちのく怪談』をキャッチフレーズにした色々な一連の動きを始めたのが実は2010年からです。そこから『ふるさと怪談』っていうのが出てくる。『仙台学』という荒蝦夷が出している雑誌がありまして、そこでこの「みちのく怪談コンテスト」という。基本は同じです。800字の怪談、特にみちのくに関わる怪談を集めて、それを直木賞作家の高橋克彦さん、民俗学の赤坂憲雄さん、このお二人と私で選者になって優秀作品を選ぶというのを2010年に第1回をやったんです。画面左側をご覧ください。2012年に第2回の発表が出てるんです。つまり、この間に2011年の東日本大震災がきてしまいました。この画面左側の様子は震災の時のまだ津波の傷跡が生々しい写真であります。この時に仙台の市内が非常に被害が大きくて、荒蝦夷の入っていたマンションも半壊状態になってしまってもう使えない、社員の人が住んでたマンションも住めないという、もう大変な状況になってしまったわけです。この写真は震災の前です。2010年に「みちのく怪談プロジェクト」ということで始めた時の最初の読者の集いというのをやまして、今日の会場と同じですけど物販をしております、みちのく怪談の本なんかを並べているところです。ここは仙台文学館という非常に素敵なロケーションの文学館です。地震で凄い被害で今ちょっと外観が変わってますけれども。地元のラジオ局のアナウンサー

の方が、怪しい何か蛸入道のようなこの方は文学教室の世話役をやっている方なんです、こんな格好で怪談を朗読してもらおうということをやっています。よく分からない妖怪みたいなものが見えると思うんです。これは森繁哉さんといって、現代舞踊のダンサーなんです。この方、荒蝦夷とは古いなじみで。白塗りでおぼけのような格好の怪談ダンスをその場で披露して下さるというもので、非常にインパクトがある。

内浦：カメラのシャッターも間に合わないぐらいの素早い動きです。

東：そうなんです。これはさっきちょっと本が出てました杉村顕道という方の展覧会がその本の出版を機に行われております。その写真です。杉村さんがかつて出された怪談本、そういうものを一緒に展示される。荒蝦夷では地元のテレビ局とかラジオ局と提携をしまして、仙台ゆかりの怪談の作家たち、文人たちの跡をたどるようなことも色々やっておりました。これは佐々木喜善です。『遠野物語』を柳田國男に語り聞かした、喜善が晩年仙台に住んでたんです。その喜善が住んでいた辺りをどの辺だったろうとか、どんなとこかなっていうんで実際に探訪をテレビカメラと一緒にやってる時の様子です。こんなふうに地元の会館に昔の写真とかをちゃんと飾ったんです。ここが喜善が晩年を過ごしたところ。不遇な晩年だったんですけど、そこを過ごした公園が今残ってたんです。これは盛岡の岩手公会堂という歴史的建造物で、ここを使ってこんな賞品も用意して。こちらは高橋克彦先生です。『炎立つ』とか大河ドラマ原作とかで有名な方ですが、高橋先生も大変怪談に造詣深い方でありまして、この「みちのく怪談コンテスト選考会」というのを盛岡で行ったりしました。これが2010年の話でございます。こういう関係の本も売ったりしていて、大変反響はありました。

2010年にこのような企画をやって、「1回だけで終わらせるのではなくて続けていこうね」という話になって、荒蝦夷の土方さんとも話していたところに（2011年）3月11日の震災で先ほど言いましたように大変な被害を受けました。私は東京に住んでおります。色んな各地のおぼけ好きな皆さんと何か荒蝦夷をサポートして『みちのく怪談プロジェクト』という、せっかく始まったムーブメントを何とか継続できないかということで、実は考えたのがその『ふるさと怪談』で、ここにお示したのは去年出した『渚にて』というみちのく怪談、震災以降の作品です。これには『みちのく怪談』の作品、震災怪談の作品を集めた共作集を出しております。この間「ラジオ深夜便」でここから色んな作品が朗読をされました。

2010年から2011年、その震災の後の過程で考えたのが『ふるさと怪談トークライブ』というものです。これはどういうことかと言うと、例えば図書館もそうです、大学の先生方もそうです、怪談に対して非常に熱い思いがあり、同時に荒蝦夷を応援したいという、そういう思いを持つ人たちが手を挙げて下さいまして全国各地で怪談を語るトークライブを開催することにしました。第1回目の時は、鹿児島なんです。「天文館」という鹿児島の一帯の繁華街のスペースをお借りしまして、ここにお示した右側に写っていますが「みちのく怪談支援募金箱」というのを作りまして、この字は作家の京極夏彦さんが書いて下さったんです。こういう募金箱を置いて皆さんに義援金を募るといふ、そういうことを致しました。新聞で「こういうトークライブやりますよ」といふようなことも取り上げて応援をしていただきました。

これが第2回、すぐその次の翌日かな。鹿児島から沖縄に飛びまして、写真の私の右側にいる方が恒川光太郎さんという『夜一』とかホラー大賞を取った作品でお馴染みの恒川さんです。その右に居るのは怪談作家の穂高さん。左側がボーダーランドという沖縄にマイナー出版社があるんですけれども、そこの代表の方です。この企画はボーダーランドさんが色々中心になって沖

縄ノリで、我々があれよ、あれよという間に会場が決まりました。ゲストも決まりました。「東さん来て下さい」という南国のりのイケイケな感じでこういう会ができた。会場は新聞社のホールなんです。震災怪談の朗読を地元の朗読家の方がして下さいました。

この写真は大阪でのイベントです。大阪はお寺さんの本堂で開催致しました。ここ和光寺という結構由緒のあるお寺で、阿弥陀池という非常に伝説の繋がっている池のある、池は境内の中にあるんですけども、そういうお寺さんで。山下昇平さんという、さっきご覧に入れた文庫本の人形を作ってるのはこの方なんですけど、こんな感じの人形も会場にいたりして。本堂でこういうふうに皆さん座っていただいて、前に怪談を語る作家さん、実話を集めている方々が出てきてお話をしました。この時はオークションをやったんですけども、オークションのお金も全て被災地に義援金として送るということになってました。

これは徳島でのイベントの様子です。徳島の小西さんという名物館長さんがいらっしゃるんですけど、北島町というところの「創世ホール」という図書館と一体になったホールがありまして、その館長さんなんです。ですから、ある意味思うがままに使わせていただけるということで小西さんから強い要請をいただいて伺いました。こんな素敵なところでございます。それに合わせて図書館で怖い本、怪談、妖怪に関する本特集という、田原と同じようなことをしていただきました。「八雲の特集コーナー」みたいなものを。やはり八雲の怪談と合わせて、やっぱり大定番なんですよね、八雲の怪談というのは。会場にはこんな紹介コーナーもございました。テレビも入っております。

次にこれが神戸の模様です。神戸の阪神淡路大震災の時に、これは警察の建物なんですけど、警察の建物がやはり被害を受けて使えなくなって半分廃墟のような状態で置かれてたところをちょっと何かツテがあったのか、主催の怪談実話を集めている方が借り受けて、そこで一日限りの怪談会をするという企画です。そういうことで天井とか震災の時の被害が生々しく残っているところで怪談を語り合うということを致しました。

これは宇和島での企画の様子です。宇和町というところなんですけども、実はここは非常に歴史的建造物がそのまま残っている地区なんです。こんなふうに江戸末期、明治初期という町並みが実はまだかなり面影を保って残っている。ここは旅館なんですけども非常に立派で昔をとどめた旅館があったり、こういう町並みです。これは日本で最も距離の長い小学校の校舎ということです。『ふるさと怪談トークライブ』をやって下さるその地域というのは、行っているとはっと気が付いたんですけど、こういう歴史的な町並みですね。いわゆる美観地区とか保存地区といわれるような、そういうものを残している地域が凄く多いんです。ここなんか典型ですけども。何でそうなるのかと言うと、やはり自分たちの郷土の古き良きものをちゃんと大切にしようという、そういう住民の方の意識の高いところは何故かおばけ好きな方が多いんです。町の色んな行政に関わってる方の中にも隠れ妖怪ファンとかが多いという。どうもそういうことが言えるんじゃないかと思います。

これは金沢での様子です。さっき豊田さんからもお話が出ましたが、金沢の四高記念館という旧制高校です。四高の建物そのまま保存している。ちょっと中が暗いんですけど、レンガ造りの立派な建物。ここが今、石川近代文学館になってます。この時はトークライブだけではなくて、ここの近代文学館さんの企画として『怖いこわい話展』という金沢にまつわる色んな怪談ふしぎ話を集めた大変充実した展覧会が夏の期間に行われたんです。やはり金沢の町中でおばけ、今内浦さんがお作りになってる妖怪出現マップみたいなものがあったりしました。次に示すのは徳

田秋聲、泉鏡花、室生犀星と並ぶ金沢三大文豪の一人の秋聲がまだ子どもの頃に天狗の神隠しを実際に見たという、そういう記事なんです。これ非常に珍しいものなのですが。写真の右側にあるのが竹の皮です。これは圓八団子という金沢の名物のあんころ餅なんです。そのあんころ餅、実は天狗の葉団扇をかたどっているんです。神隠しにあった男に天狗があんころ餅の製法を伝授したという話です。今もですから駅のキヨスクなんかでも売ってる圓八のあんころ餅と有名な物ですけれども、そんな物まで展示して地域とそうした妖怪変化との関わりが一望のもとにできるという展示でした。これは芥川龍之介の『妖婆』という怪奇小説の自筆原稿です。そういうものも持っている。非常に色んな変わったものを持つて文学館です。こんな感じで『ふるさと怪談トークライブ』ということで、少女漫画の波津彬子さんが中心になって企画をして下さいました。こんな感じでやりました。昔の四高の教室です。そこがやはり舞台です。これもそういう歴史的建造物と怪談との関わりという一つの例だと思います。この時は地元の金沢の高校生、演劇部の高校生たちにも参加してもらいました。四高の寮というのが昔あったんですが、旧制高校の学生たちが寝泊まりする、その学生たちが最初に新入生として入って来た時の試練が怪談百物語で、上級生たちが講堂に新入生を集めて代わる代わる怖い話を聞かせて震え上らせるという、そういうことをした。この近代文学館には、その台本がまだ保存されてるんです。その台本から典型的なお話をこの演劇部の高校生たちが朗読してくれたという。

また変な物が出て参りましたが、これは飛騨で開催したときの状況です。会場は飛騨市の図書館です。そこの館長さんが大変物好きな方でありまして、トークライブをしたいということで我々行きまして、この時この写真でお面をかぶって写っている方たち実は体験者なんです。ちょっと雰囲気盛り上げようということで謎めいた思考で語りをしようという、面白いお話でした。一番左にいらっしゃる和服の方は語り部さんです。飛騨の民話を語る。一番右もそうです。ちょっと画面が切れちゃってますけれども和服の方。このお二人が飛騨の民話を語る語り部さんを紹介して下さいまして地元の怪談を本当に臨場感たっぷりに地元の言葉で語って下さいました。この和服の人は京極夏彦という人なんです。右側に座っているワンピースのお姉さんが宮部みゆきさんです。

次にこれは京都の郊外の市で京田辺市というところがあるんですが、そこでやった『ふるさと怪談』です。京極さんと宮部さんが、こちらからお願いしたわけではないのにご自分たちから申し出て下さって来て下さるといふ大変なことになりました。こんなサイン本も作って、全部チャリティーで寄付にあてていただいた。ふるさと怪談という、ただのダジャレですけれども。こんなサイン本を作って下さった。それから宮部さん自ら募金を呼びかけて下さるといふ。この時いっぱい来場者がいました。満員の観客でございましてたくさん募金が集まって本当にありがたかったです。

これはテキサス大学で開催したときの情景です。とうとうアメリカにまで進出致しまして、テキサスの大学の先生が日本出身の方で大変『ふるさと怪談』の主旨に共鳴して下さいまして我々海を越えて行って日本の話をした。だけど向こうの学生さんは本当に熱心に、日本語を学ぶ教室の人たちなんである程度、日本語も分かる方々で非常に震災に対して心配をしていて、自分たちが凄く大好きで懂れている日本が大変だっという、そういう思いがひしひしと伝わってまいりまして大変感動致しました。

駆け足ですみませんが大体こんなような『ふるさと怪談』のことを2011年から今も続けております。実は写真が見つからなくて紹介できなかつたんですけれども、愛知でも名古屋でも何度

も行われておりまして、それがきっかけになってさっきの『愛知妖怪事典』などはそういう繋がりが盛り上がりまして生まれた側面もあるのかなと思ったりします。本当に怪談とか妖怪というのが色んなかたちで地域の人たちを繋げる、これは多分間違いのないところだと思っております。我々の取り組みははじめ震災に対する被災地支援というのが一つ柱ではあったんですけども。自分たちの地域でおばけ好きな方々が集まることによって、皆さん面白いんですよ、地域ごとにそれぞれの集まりがトークライブじゃなくても定期的に集まって怪談話をしようやっというところがあったり、あるいはその行政の方が逆にこうしたことでいっぱい人が集まる。今日もそうです。人がたくさん集まるということに注目をして下さいまして、しかも内容が、最初は色眼鏡で見られるわけです。怪談というと稲川淳二的な感じでそんなことをするのかなみたいな。稲川さんはもちろん素晴らしい方なんですけど、怖がらせるだけのものかなっていうふうに思っていると、実際の話は、例えば愛知だったら「伊勢湾台風と怪談」とか非常に地域ごとの色んな歴史文化、そうしたものと関わるイベントなんだということをご理解いただいて協力をしていきましょうとなるんです。そういう動きにも繋がってくるという色んなかたちで我々が当初思っていたのとは全然別なかたちの広がりも今できてきつつあります。そういうことをやりながら感じていたことを大変駆け足で申し訳ございませんがご紹介させていただきました。

内浦:ありがとうございます。今回もイベントに来て下さるお客さん、皆さんのことなんですけど。妖怪とか怪談のキーワードで来て下さるお客さんというのは、何というか、東さん、共通点がありますよね？

東:例えば図書館を利用してるという意味でもやっぱりおばけ好きな人たちって当然その資料として昔のことを調べるには図書館に行くから、そこで色んなことを調べる。地方に行ってもまず図書館に私なんか入るんですよ。郷土史とかに行ってもまず一当たりあたることによって大体その土地の特色であるとか妖怪関係と伝承の情報も入ってくるっていう。ある意味、真面目です。おばけ好きな人たちは。

内浦:お話の中にも古いものを大切にする人たちは親和性が高いというようなお話もありました。地域の古くから伝わるものに興味があると大切にされている方って結構一緒していただける機会が多くありますよね。

東:そうですね。これは江戸時代からそうで、江戸時代の半ばぐらいから色んな地域ごとの怪談集というのができてるんです。要するに江戸時代の平和な時期には教育が普及をして地方に色んな文化人たちがたくさん出てくる。有能な方々が。そういう方たちがまず注目するのがやっぱり自分の生まれた土地の色んな伝承であって、だからさっきの八雲や柳田が民俗学という方向へ行く最初のほうが江戸時代中期ぐらいから地方の文化人たちによってできてきつつあった。その中心の一つになっているのが妖怪、怪談なんです。そういう文化人ってほんとにお化けが好きなんです。嬉しそうな筆の調子でそういう話を集めて書き残しているっていう。多分そういう流れの今我々が現代版という感じにいつてるんじゃないのかなと思います。

内浦:ありがとうございます。それでは豊田館長、いかがでしょうか。東さんの『ふるさと怪談』、東さんは他のご活動もはば広くなされています。ご著者もたくさんあるんですけども、豊田さんから見て東さんへのご感想やご質問などございませんか。

豊田:改めて興味深く今のお話を聞かせていただきました。震災の話が出てまいりましたけれども、東日本大震災から7年経ちましたが、ここ数年、実際に震災のあった土地で亡くなった家族の霊があったとか、そういうような話というのが色々出てきて、それは結構、学術的な本にもなっ

てたりしています。そういうようなことってどのように捉えておられるのかな、と、東さんに伺いたい。同じこと小泉先生にも伺いたいんですけど。そんなふうなことをちょっとお考え聞かせていただいてもよろしいでしょうか。

東：はい。第一にはマスコミでも騒がれた『タクシー怪談』です。タクシー幽霊の話。被災地で女の人とかをタクシーに乗せて、そうすると行き先が津波で何もないところで消えてしまうっていう。本当にたくさんそのような報告がされたと。実際そこで以前から暮らされていて自分の肉親とか知り合いを津波とかで亡くされた方っていうのは、そういう怪談みたいなものに対してアレルギーがあるかなと思ってたら実は逆にはないんです。非常によく言われるフレーズです。つまり「幽霊でもいい、おばけでもいいからもう一度会いたい」みたいな、そういう感覚のほうが多分強い。怪談的なものというのはさっきも言ったようにただ怖がらせるだけではなくて、八雲の怪談がまさにそうだと思います。非常に人の心の機微に触れる。今日、琵琶で演奏して下さったおしどりの話もそうですけれど、人間の悲しさ、あるいは愛おしさ、そういうものを一つの寓話といってもいいんでしょうか、一つの象徴的なお話として怪談は伝えるという、それがまさに被災地では実際に語りの場で流通をしている。それをちょっと垣間見た感じが私はします。私自身は東京で暮らしておりますので決してそういう被災地の怪談に関して立ち入って何か調べたわけではなく荒蝦夷の土方さんとか地元で怪談を集めている黒木君とかオダ君とか、そういう作家の人たちの話を伝え聞くかたちですけれども。皆さんそうした怪談的なものについて、むしろどちらかという震災の喪失感を埋める、心を埋めていくような、そういう作用があるものとおばけの話というのを捉えていらっしゃるじゃないかと思います。非常に向き合う姿勢が真面目なんです。それはよく怪談を聞いて集めることをしている実は作家たちはみな言いますよ。凄く真剣に語ってくれるし。だから自分たちも真剣に聞き取って真剣に言葉にしたいということをよく言ってます。

内浦：凡さんいかがですか？

小泉：はい。お話、大変共感しながら伺いました。松江は直接地震はあまりないところなんですけれども。東日本大震災の時は小泉八雲は逆に「津波」っていう言葉を世界に紹介した人でもあるんで、オックスフォード英語大辞典を見ると津波 (tsunami) っていう項目がありますけれどもラフカディオ・ハーンが最初に使ったって書かれています。そういう意味で『ハーンと津波』という展示会をやって、そこで義援金を集めたんです。それはまた別の話ですけども、怪談って悲しいっていうこと、愛おしいっていうこと両方あると思うんです。日本語の「悲しい」っていう言葉には「愛おしくてしょうがない」っていう意味もあるんです。沖縄の古い言葉には、例えば「ありがとう」のことを「とうとうがなし」っていうふうに言います。「マユンガナシ」なんていう民族行事もありますけれども。マユンガナシっていうのはマユなんです。「かなし」は愛おしくてしょうがないっていう敬愛の対象になるような、そういう意味だと思うので怪談にはそういう部分があると思うんです。怪談を大事にする町っていうのは結局ご縁を大事にする町だと思うんです。だから松江の人が受け入れてくれてるのかなと思うんですけれども。縁っていうのは人知を超えた力っていうことですので、結構日本人って基本のご縁を大切にしている民族だと思います。今の若い学生でも入社すると実力で入社したのに「縁あって本社に入社させていただきました」とか平気で言ったりするんです。やっぱり縁を大事にするって決して悪いことではないと思います。そういう意味では私もこれから少なくとも松江では怪談を通してご縁を大事にする町というのを作っていききたいなというふうに思っております。今日改めてそういう共感を致しま

した。

内浦：ありがとうございます。豊田館長、いかがですか？

豊田：ほんとに聞きたいと思っていたことを今お二人から聞かせていただいたんでとても嬉しいんです。先ほど東さんが怪談好きの町と町並みが残っている町って結構一致してるんだよねってようなお話をされてたんですけども、これ一つの仮説なんですけど、もしかすると怪談が好きなんっていうのはふるさとにある色々なものをただ昔のものだからありがたいっていうんじゃなくて、それプラス自分たちの心に訴えてくるような物語が息づいている、そういう場所だというふうに関心する、それを大事にしている人たちがなんじゃないかなっていうふうな思うんです。それこそ柳田國男と並ぶ民俗学の非常に有名な方で南方熊楠っていう方がいます。あの方が鎮守の森を守る運動っていうのをされてまして。鎮守の森っていうのは今も当然環境の立場からも非常に重要っていうふうにいわれているんですけど、そういうようなものを守っていくためには『となりのトトロ』みたいなお話もいいんだけど、やっぱり自分の祠が鎮守の森の物語みたいなものを伝えていけるかどうかっていうのが凄く大事なんじゃないかなと思うんです。先ほどちょっとご紹介した『お散歩 e 本ふしぎ編』の中で田原の久丸神社の寝祭りっていうのを中学生か高校生が再話したものを載せてるんです。それはどういう話かって言うと、久丸神社に祀られている、南朝の王子っていうようにいわれているんですけど、その南朝の王子が実は皮膚病を患っていて非常に人に見られたくない状態だと。それを神事に置きかえて久丸様が神社を渡っている間は行列なんだけど、行列を見ると祟りがあるぞっていうような話があるんです。その話を基にして再話で見ちゃだめっていう怪談を書いた中学生か高校生がいるんですけども、そういうような話を知っていると知らないのでは全く久丸神社に対する関わりが違うだろうと思うんです。ほんとにちっちゃい神社なんですけれども。僕なんか愛らしい桜の木もあって桜の季節に行くって凄くいいよねって思ってるんです。ある意味どこの地域にもある神社。だけど、その話を知っていることで自分にとっての大事な鎮守の森になる。そういうようなことがあるんじゃないのかなって思うんです。そこに何か怪談好きと町並み保存の関系の秘密があるような気がちょっとしたんです。

【「怪談・民話を地域資源として受け継ぐ」とは】

内浦：ありがとうございます。どんどん聞きたいんですけども。ちょっとずつ足音が聞こえてまいりました。最後の足音が聞こえてまいりました。これで最後になるんですけど、今回のシンポジウムテーマである「怪談、民話を地域資源として受け継ぐ、活用する」っていうのはどういうことか、また、そのためのキーポイントは何かということをもとめも含めまして一言ずついただけたらと思います。それでは東さんからお願いします。

東：豊田館長のお話を受けたかたちで話させていただきます。先ほどご紹介した被災地の皆さんの話は、結局は物語なんです。「津波が来る」、その日以前の物語を一種の記録保存装置みたいなものとして怪談というものが機能する。つまり、怪談を聞いたり読んだりすることによって自分たちの町の昔の姿というものが蘇ってくる。これは別にそういう被災地だけではなくて、特に災害でということとは関係なくそこに色々な怪談の中にももっている昔の地元の人たちの思いであったり出来事がやっぱり物語というかたちで蘇る。今おうかがいした神社のお話もそうですけど。色々な町の物語あります。恋愛物語もあつたり。おそらく文学の極意は怪談、あるい

は八雲のいう怪談の中に真理があるということだと思うんですけど、非常にパワフルな物語が怪談である。そこには色々な人の思いが記憶されているっていう。そういうところを上手く活かしていけたらいいんじゃないかなと思います。

内浦：世の中にいっぱい地域資源がありますが、地域資源の中に心とか真理とか物語性っていうものが含まれる地域資源って怪談、民話ならではの特質がありますね。

東：しかもお金がかからないですから。

内浦：収益率が高いというお話。

東：そうです。怪談、民話の活用っていちいち箱物的な行政と全然、対照的にお金かかんないけど凄く豊かなものがそこにはおそらく生まれてくるはずでということです。

内浦：ありがとうございます。先に豊田さんにお伺いしてもよろしいでしょうか？

豊田：はい。小泉さんのご講演の最後のほうで「異界と共生できる社会は幸福な社会」だっというようなことをおっしゃっていて、それが凄く同感です。色々感じるところがあったんですけども、特に最近は何かという、我々とあなた方は違うんだっというように強調されてある意味、凄く偏狭な方向に流れがちな世の中っというのを感じているんですけども。ふしぎにまつわる話っというのはむしろ異界と共生できる、異界と共に暮らしていくことの幸せっいうことを感じさせてくれる物語が凄く多いんじゃないのかなっというふうに思うんです。それはさっきのご縁の話とも繋がっていると思うんですけども。そういうものを今の時代に合ったかたちで残していけるにはどうしたらいいんだろうっというように色々考えています。一つは先ほど電子書籍の話をしましたけれども、これは田原の図書館のウェブサイトから『お散歩e本』がダウンロードできるんで是非ご覧いただければと思うんですけども、そういうようなものもあるでしょうし、今オープンデータっというような言葉もあります。色々な物語の種になるようなものをどなたでもアクセスして利用できるようなかたちでインターネット上にあげていく。そうすることで色々な物語をそれぞれが自分にとって合った、あるいはその地域に一番合ったかたちで作っていく。あるいは、保存していくっということが非常にやりやすくなるんじゃないのかなっというふうに思うんです。そういう意味では私、教育委員会の人間なので「ふるさと学習」っというようによく仕事の中で言うんですけども、「ふるさと学習」と例えばプログラミング教育みたいなものを実は一緒に行うことで凄く色々な可能性が拓けてくるんじゃないのかな。そのきっかけにも怪談とか民話っ有効に使えるんじゃないのかな、なんてことを感じています。

内浦：付け加えるかたちで一つ報告させてください。今日も会場に来て下さっているんですけど、豊橋市役所の産業政策課の方が中心になられて、豊橋駅のJRと名鉄が一緒になっている改札口出たところに大きなスクリーンがありますよね。広報とか流れている。町のお知らせとか。その隣に(2017年)4月からタッチパネル型の「豊橋の案内システム」ができるそうなんです。豊橋の観光案内ですとか市政情報等々がそのタッチパネルで見られるんですが、その中に豊橋のオープンデータも色々な情報が見られるようになります。その一つとして『豊橋妖怪百物語』も入れていただいているんです。これは何かと言うと、百物語の宣伝ではなくて、豊橋でこうやって民話や妖怪のお話が受け継がれてきたことを町の人にも外から来た人にも知っていただく。これができるのもオープンデータの流れがあって、それを行政の方たちが町の情報として大切なもの、皆に知ってほしいという思いを持ってかたちにして下さっていることだなどと思ってとても嬉しく思っています。4月に入りましたらどなたでも駅でタッチパネルで見ることができるようなので、

一度皆さん試してみてください。最後は凡さん、お願い致します。

小泉：今、豊田館長のお話もちよっと受けて申し上げたいと思うんです。共生ってということに関して感じたのはやはり10年ぐらい前です。アイルランドに何度も行くんですけども、一番西の外れのストランドヒルっていう大西洋に面した小さな村での出来事だったんですけども、夏なのにあまりにも寒くて、店って一軒しかない。ジェネラルストアです、万屋さん。そこに入ったんです。三人で入ったんですけど店番してたおばあちゃんが僕のほうに向かって近づいて来て、「あんた妖精好きじゃない？」って言われたんです。「ちょっと私の話聞いてよ。私48歳のときに夫に先立たれた。その時バンシーが枕元に来て泣いて、明日の朝あなたの夫が死ぬわよということを手言したっていう。その通りになった。私はその光景を今でもしっかりと覚えてる。あなたに伝えたかったのよ」って言われた。ほんとに異界と現実の世界は近いところであって、ほんとに共生してるんだと思うんです。そのおばあちゃんはそのいうことを異界に思ったり自然にいい夢を持って地域で生きてるっていうことに幸せを感じておられると思うんですけども、ご一緒するってそういうことなのかなと思います。もう一つ、子どもたちに伝えるっていうことを私、凄く大事だと思ってまして、そのためにはやはりおとなが民話や怪談の意味をしっかりと理解して伝えていく必要があると思います。でも私自身は手探りなんですけど今年で13回目なんですけど、毎年夏休みに小学生を集めて「子ども塾」というのをやっているんです。子どもたちに五感体験をしてもらって、その中で必ず怪談を使うんですけども、そうすると違う町の姿が見えてくるんです。こんなものも町の宝なんだということに気付いてもらって「五感マップ」というものを毎年作ってます。観光マップに出てこないような地図が出来上がるんです。だからといって数値で計れるような成果は出てこないんですが、感じるのは子どもたちが確実に地域に関心を持っているということ。もうすでに初期の子ども塾に参加して下さった子どもたちが僕の勤務先の短大に入って地域のことをもっと学びたいって言うてるんです。何人か卒業しましたけれども。怪談や民話を通して地域の誇りというものを育てていけばいいのかなというふうに思うんです。伝えるということを通して是非ともしていきたいなと思います。

内浦：ありがとうございます。皆さんの「まだ聞きたいよ」という顔と視線を感じるんですけど17時の終了の鐘が聞こえてまいりました。本日のシンポジウムとしてはこれで終了となるんですけども、1回目が田原図書館、2回目が総合郷土研究所の今日の会、3回目はということで皆さんのご期待のお声をいただきましたらそうしたことも実現できるのかなと思いますので、また次の場所でお会いできることを楽しみにしつつ今日はこの辺りで終了とさせていただきます。登壇者の皆様、ご来場の皆様、どうもありがとうございました。

【閉会あいさつ】

司会（近藤）：どうも皆様、本日はご来場いただき、また長い時間お付き合いいただき、ありがとうございます。こんな（赤ちゃんを抱っこした）格好で失礼致します。私の娘を迎えに中座している間にパソコンが落ちたりしたみたいです。すみませんでした。シンポジウムのほうはこれで終了ということになりますが、最後に閉会の挨拶を総合郷土研究所所長の神谷智よりさせていただきます。

神谷：今日はどうも遅くまでありがとうございました。私は郷土研の所長をやってちょうど3年が終わるところなんですけども、今まで文学関係の企画をあまりできなかったです。たまたま近

藤さんがこういう案を提供して、怪談にまつわる方々にご参加いただいて、改めてお礼申し上げます。小泉八雲怪談のことを興味持って参加された方も多々みえるかと思いますが、今回のシンポジウムはそれを含めてそういう資源をどうやって活用して地域おこしを達成するかということで社会的な要素もあったかと思います。ちょっとその辺、期待が外れた方も見えるかもしれませんが、東先生の中でも色んな怪談の情報もいっぱいあったのでそれをまた参考に今後色々興味を持って怪談、民話の話を考えて下さればいいかなと思っています。会場は古い建物でエレベータもない。ご不便をかけて申し訳ないんですが、空調のほうも古くて上のほうと下のほうと気温が違う。なかなかご不満な方もあるかと思いますが、その辺も古い建物ということでご勘弁いただきたいと思います。郷土研としてはこういう文学、民俗、社会学、その他にも地理や歴史等も考えていきますので、またこれを機会にこれからも郷土研のシンポジウムや講演会にご参加いただけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。最後にアンケートを配っております。受付のほうで回収しますのでご協力のほうよろしくお願いします。本当に今日はどうもありがとうございました。

近藤：ありがとうございました。それでは壇上のパネリストの方に今一度大きな拍手をお願い致します。ありがとうございました。これにてシンポジウムを終了させていただきます。お気をつけてお帰りいただければと思います。

